
海の竜騎兵 2

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の竜騎兵

2

【Zコード】

Z9520D

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

竜騎兵訓練校にも卒業シーズンがやってきた。私も最後の、そして最大の訓練を受けることになった。「海の竜騎兵」の続編です。

卒業とは、つねに突然やってくるものなのだろう。少なくとも私の場合はそうだった。クラスメイトたちも同じような感想をのべていたから、きっと誰にとってもそうなのだろうという気がする。

卒業の直前には卒業試験があり、それに合格しなくてはならないのが学生というもののだろうが、竜騎兵訓練校では少し事情が違っていた。卒業試験など存在せず、ただ相棒のクジラと一緒にで海にほうり出され、大洋を横断し、訓練校まで自力で戻ってくるという訓練が行われるのだ。それが卒業試験のかわりであり、竜騎兵としての訓練の総仕上げでもあるのだろう。

学生は船に乗せられ、クジラとともに大洋の向こうの端まで運ばれる。そこでエイヤと放たれる。そのあとは誰もサポートしてくれないのだ。1500キロの距離を泳ぎきり、何とか戻ってくるしかない。

いつの説明すればひどく過酷な訓練のように聞こえるだろうが、実際はそうでもなかつた。公式には否定されているが、学生たちがたどるコースの途中、何ヵ所かには船が配置され、非常事態に備えている。海軍の他の部隊や空軍も協力してくれ、この時期の訓練海域ではやたらと多くの航空機や艦船を見かけることに気がつくだろう。そういう気づかいには気づかないふりをして、学生たちは横断を試みるのだ。

横断に失敗する学生も、中にはもちろんいる。だが、それで卒業が取り消されるということはない。この横断が『卒業試験』ではなく、ただの『訓練』と呼ばれている理由がそこにある。6年の期間

と莫大^{ばくだい}な費用、専用のクジラを一頭ついやして育ててきた訓練生を簡単に手放すほど、海軍はバカではない。

入学して6年がたち、私もこの横断訓練を受ける日が近づきつつあった。相棒のクジラの名はチビ介といい、仲はとてもよかつた。身体は大きいがまだ子供のマツコウクジラで、いつも私に甘えたがつた。足音を聞き分け、私がプールに近づくだけで顔を出し、いつも背中からピュッヒ水を吹いて迎えてくれた。

1500キロの海を2週間かけて横断するのだから、装備はかなりの重量になつた。水と同じ比重に調整された小さなカプセルにおさめ、このカプセルは流線型をし、長いロープでもつてクジラにつながれ、水中をけん引されることになる。

通常であればクジラと竜騎兵は輸送船に積み込まれ、目的の場所まで運ばれる。だが今回、海軍は新しいことを試みる気になつたのだ。言つてみれば実験のようなものだが、その第一号に選ばれたのが私だつたといつのは光栄ながどうなのか、自分でもよくわからぬ。

海軍は一機の飛行艇^{ひこうてい}を建造したのだ。飛行艇というのは、滑走路がなくても海面で離着陸できる種類の航空機で、そう珍しいものではない。だが今回のこれは今までにない大型のもので、卵をはらんだ金魚のように大きな機体の内部に、クジラを丸ごと一頭積み込めるだけの水槽を備えていたのだ。

つまり海軍は、この飛行艇を用いれば、世界中どここの海にでも竜騎兵部隊を迅速に展開できると考えたのだ。私に言わせればバカバカしいとしか言いようのない作戦だが、お偉方は本気だつたらしい。事実一機が発注され、落成し、海軍に納入されたのだ。

そうやって、では一度クジラを実際に運んでみるかという段になつて、竜騎兵訓練校の大洋横断訓練に白羽の矢が立つたのだ。

私とチビ介がその実験台に選ばれたとき、同級生や先輩たちは同情してくれた。中には、早々と悔やみの言葉をかけてくれた気の早い者もいたほどだ。だがそれも無理はないほどヒトリ国海軍は新しい物好きで無謀で、まいきよ新型の艦艇やら潜水艦やらでどれだけの失敗を重ねてきたのか、枚挙に暇がないほどだ。

それでも命令だから仕方がない。その日が来て私は飛行艇に乗り込み、チビ介は水槽に入れられ、その水槽はワインチを使って、ゆっくりと機内に積み込まれたのだ。

飛行艇はそのままスムーズに離陸することができたのだが、私が10分おきに立ち上がり、機体の後部にある水槽へチビ介の様子を見にゆくものだからパイロットたちは笑っていたが、私は笑われても気にならなかつた。竜騎兵とクジラの間にはどれだけ強い絆きずなが生じるものなのか、飛行機乗りたちには理解できないのだろう。逆に私には、飛行機のように金属の塊にすぎず、魂すら持たない物に命を預けることができる男たちの気が知れないというところだ。

水槽の中で、チビ介は機嫌よくしていた。ヒレをわずかに動かすことができるだけの余裕しかないが、水温がうまく調節され、ろ過装置もきちんと作動しているからだろう。手を伸ばし、私は肌をなでてやつた。そのとたん飛行機が揺れ、肩いつぱいに水がかかつてしまつたが、チビ介がキキキと楽しそうに鳴いたので、制服がぬれてしまつたことも気にならなかつた。

操縦室へ戻ると、もちろんパイロットたちは私のまでの様子に気がついた。パイロットは一人いて、機長が言った。

「すまん。揺れたのは乱氣流のせいだ」

「いいんです」私は答えた。

私は操縦室の窓の外を眺めた。晴れた明るい朝で、どこまでも続く海がきらきらと光をはね返している。副操縦士が口を開いた。

「君はスミス提督の孫だといふのは本当か？」

「ええ」

パイロットたちは不思議そうな顔をした。

「それがなぜ竜騎兵部隊なんかにいる？ 推薦状をもつて、もつといい部隊だつて希望できたんじゃないのかい？」

「あら、竜騎兵も結構おもしろいですよ。クジラはかわいい」

機長が笑い始めた。

「まるで海のカウボーイみたいなセリフじゃないか。そういうば…」

ところがその瞬間、無線機から声が聞こえ始めたので、おしゃべりはおしまいになった。

「飛行艇404、聞いているか？」と無線機は言った。四十歳ぐらいの男の声だが、海軍司令部の無線担当官だろう。竜騎兵訓練校の前を離陸してからずっと私たちの道案内をしてくれていた。

「JPN404。よく聞こえる」副操縦士が答えた。

「針路を北へ12度振れ。不審な飛行機がいる。我々が知る限り、
国内に該当機はない」

面倒くさそうに副操縦士は答えた。「民間機じゃないのか？」

「そんな届けはない。問い合わせてみたが、航空局も知らんと言っている。漁船が見かけて通報してくれたんだが、無線で呼びかけても応答がない。接近し、正体を確かめてくれ。どうせどこの飛行学校の学生が道に迷ったのだと思うが」

不機嫌そうに機長が割り込んだ。「おい、JPN404が生きたクジラを積んでるんだぞ」

「それは知っているが、おまえらが一番近くにいるんだ。数分で終わる仕事だ。文句言うな」

通信はこれで切れてしまったので、舌打ちをして、機長は操縦桿そうじゅうこうを左に倒すしかなかつた。副操縦士と私は顔を見合わせた。

司令部が言つたとおり、目標機の姿が見えてきたのは数分後のことだつた。水平線のかなたに、ごく小さな点が銀色に見え始めたのだ。最初に見つけたのは私だつた。

「見えたわ」

「どこだ?」私が指さす方向を向き、機長たちは目をこりした。

「あそこです。飛行機に違いありません。銀色の輝きが見えます」

アクセルに手を伸ばし、機長は飛行艇をグイと加速させた。とたんに機体が揺れ、気になつたので私はまた立ち上がり、チビ介の様子を見にいった。チビ介はやはり機嫌よくしており、大きな瞳で私を見つめ返した。

操縦室へ戻ってきたときには、飛行艇は目標機にかなり接近していた。双眼鏡を使い、機長が眺めていた。だが、一人の様子がおかしいことにすぐに私は気がついた。副操縦士が無線機のスイッチを入れるのが目に入った。

「こちら404」

返事はすぐにあった。

「こちら司令部だ。なんだつた? 学生の訓練機か?」

機長が手渡してくれたので、私も双眼鏡を向け、窓の外を眺めた。ダイヤルを回してピントを合わせると、相手の姿を大きくはつきりと見ることができた。機長の声が聞こえた。

「一九四〇四機長、アンダーソンだ。オレの声がわかるか？」

「わかるよ。どうしたんだい？」司令部の担当官が不思議そうな顔をしているのが目に見えるような気がした。機長が続けた。

「オレは今、目標機を間近に見てている。国籍不明。所属も形式も不明。見たことのない機体だ。エンジン形式も不明だな」

「なんだつて？」

「目標機にはプロペラがない。胴体もない。まったく見慣れないもので、機体は巨大な三日月かブーメランのような形だ。それでもまっすぐに飛んでいる。いく薄いが後部から排気煙らしいものが出ているから、何かのエンジンを備えているのはたしかだな」

「ロケットの一種じゃないですかね」隣から副操縦士がささやいた。

機長は不満そうな顔をした。「ロケットついでにや、鉛筆みたいな形なんだろ？ あれはブーメラン形だぞ」

「でも」私は口をはさんだ。「ブーメランみたいにくねくね回転してはいませんね」

「あー」司令部の男はしひれを切らしたようだった。「それで結局なんなんだね？」

私たちは顔を見合わせ、機長は困ったような顔をした。「要する

に飛行機だが、胴体もプロペラもなく、全体が一つの翼のような形をしているということだ。垂直尾翼もあるが、もうしわけ程度に小さなものだ

「機体にマークはないか?」

「ないね。新品のフライパンのようにつるんとしている」

「方位は?」

機器を眺め、副操縦士が数値を読み上げた。私は双眼鏡を使い、まだ相手を眺めていた。

「あれの正体は何なのでしょうね?」

私たちは首をかしげ続けるほかなかつたのだが、司令部と話すうちに「どうやらハマダラカ空軍の新型機らしい」という結論になつた。おそらくテスト飛行中なのだろうが、それがなぜこんな場所にいるのかは推測するしかなかつた。ここは明らかにヒトリの領海内であり、あの飛行機は領空侵犯をしているのだ。いくら自信があるのか知らないが、たかだか新型機の試運転で、一歩間違えば戦争につながりかねないそんな危険を犯すものだろうか。わけがわからず、私たちは頭をしぼり続けるしかなかつた。

しかし意外にも、その答えを教えてくれたのはあの新型機本人だつた。突然機体を震わせ、後部から煙を吹き始めたのだ。

「煙を噴いているぞ!」副操縦士が声を上げた。

私の手から奪い取り、機長は双眼鏡をのぞき込んだ。操縦は副操

縦士に任せた氣になつたようだ。

「煙だつて?」無線機から声が聞こえる。

「エンジントラブルらしい」機長が答えた。「白い煙だから、燃えているのはエンジンオイルかな。燃料に引火しなきやいいが」

「ハマダラカの飛行機なんでしょう?」私は言った。

「ああ」機長は無線機に話しかけた。「あいつはどうやら、少し前からエンジン故障をかかえたまま飛び続けていたらしい。だからこんな低空を、しかも飛行艇でも追いつけるほどの低速で飛んでいたんだ」

「なるほど」

「こんな場所にいる理由もそれで説明がつく。公海上で長距離飛行テストでもやつていたのだろうが、こんな緊急事態だ。エンジンが停止してしまう前に、ヒトリの領海を突っ切つてでも、最短距離をとつて本国へ帰ろうと試みているんだ」

「それが裏目に出たといつわけか」

「何だか知らんが、ひとつエンジンがオシャカになつた。見ろ、高度を下げ始めたぞ」

「おい、まさか墜落するのか?」

機長は口をゆがめて笑つた。「敵国の新型機が丸ごと手に入るチヤンスじゃないか。もつとも、海底から引き上げることができたら

だがな

「IJのあたりの海はそれほど深いわけではありません。800メートルぐらいだと思います」私は言った。「それでも、何かを引き上げるとなると一苦労ですね」

副操縦士は黙つて会話を聞いていたが、カーブを描き始めているハマダラカ機に合わせてアクセルをしぼり、すでに操縦桿を倒し始めている。もちろんそのしぐさには機長もすぐに気がついた。司令部にむかって言った。

「やつは機首を風上に向けて立てた。不時着水するつもりなのは明らかだ。となると、ほつてもおけん。こちらも着水するぞ。乗員を救助する必要がある」

ところが司令部からの返事はこうだった。

「乗員もそうだが、機体の方にもつと興味がある。乗員に機体を破壊させないよう努力しろ。なんとか手に入れたい」

「海に沈んじまつたらどうするね？」

スイッチが切れ、司令部の担当者は一旦マイクロフォンを置いたようだった。その間もハマダラカ機は高度を下げ続け、波が少しでも静かな場所を探している様子だ。旋回しながら、私たちはそれを見守っていた。

司令部からの返事が返ってきたのは、ハマダラカ機の機首が水面に触れるころだった。子供が遊びで投げた平たい石のように水面を切り、前方に大きく波を飛ばした。フラップをいっぱいに広げているのが見える。

私たちにはその真上を横切ったのだが、いくらアクセルをしぼっていても、こちらも空を飛んでいるのだ。あつという間に通り過ぎ、ハマダラカ機は背後に見えなくなってしまった。操縦桿を倒し、副操縦士が急旋回を始めたのは言つまでもない。

「着水後、もしもハマダラカ機が沈没を始めた場合には、無線機からふたたび声が聞こえ始めた。「竜騎兵とクジラを海に下ろせ。沈没する機体を海底まで追跡せよ。沈没場所を確認しだい、竜騎兵は水面に戻つてこい」

「おい」機長は不満そうに声を上げた。「この竜騎兵は正規兵じゃない。ただの訓練生なんだ。学生にそんな仕事をさせるつもりか?..」

だが司令部は意に介さず、担当面は同じことを繰り返すばかりだつた。

「竜騎兵、命令は聞こえたか? すでに応援がそちらへむかいつつある。おまえは24時間だけ機体のお守りをすればいい。そのあと正規兵と交代させてやる。なあに、まだ機体が沈むと決まったわけじゃないぞ…」

副操縦士が機長の肩をちゃんとつづくのが目にに入った。機長が振り向くと、副操縦士は窓の外を指した。

ハマダラカ機はすでにほとんど停止し、波の上に浮かんでいた。まるで平らで大きな葉が水に浮かんでいるかのような眺めだ。着水体勢に入りながら、私たちはもう一度その真上を通り過ぎた。操縦室の上部にある四角いハッチが開き、乗員たちがはい出してくるのが見えた。

乗員は3人いるようだったが、そのうちの一人がゴムボートの用意を始めていたのが目についた。飛行艇は最後の旋回を終え、ねらいをつけて着水に入った。

シートに座つてベルトを締めると、私がいる場所からは窓の外はほとんど見えなくなつてしまつた。着水した瞬間には飛行艇がボヨンと大きく揺れ、まるで巨大な豚肉の脂肪の上に落とされたかのような気分がする。しかし飛行艇の底部と水はすぐにケンカを始め、ゴトゴトという振動が足の裏に伝わつてくる。だがついには水が負けを認め、飛行艇を受け入れるのだ。そのころには飛行艇の速度もずいぶんと落ちていて、そのあとの揺れ方は普通の船とあまり変わらない。

すぐにシートベルトをはずし、私はチビ介の様子を見にいった。突然の揺れで少しひっくりしている顔つきだったが、チビ介は元気だつた。私の顔を見ると胸びれをぱたぱたと動かしたので、私はほつとした。

ドアを開けて操縦室に戻ると、男たちが振り返つた。その様子が何だか普通ではないことに私は気がついた。「どうかしたんですか？」

機長が口を開いた。「ああ竜騎兵。ハマダラカ機が今しがた沈没したところだ」

乗員たちの救助は機長と副操縦士に任せ、私は再び機体の後部へ走つていった。乗員たちの乗つたボートは、おとぎ話の小人を乗せた木靴のように波の上で揺れている。すでにオールを取り出し、こちらへむかってこぎ始めているのが見える。

私は海面に目を走らせた。透明度の高い海にハマダラカ機の機体は完全に包まれてしまっているが、銀色の影はまだ水の下に見ることができる。機械油が水面をただよい始めている。

おそらく機体に大きな穴は開いていないのだろう。内部に少しは水が侵入しているかもしぬないが、まだ空気が入ったままのスペースもたくさんあるのだろう。だから石のようにストンと沈んでしまわずに、ああやつて水中をただよっているのだ。

だがそれも長い時間のことではないだろう。いつか空気が抜け、重くなつた機体は海底へむかつて落ちてゆくだろう。

大洋には珍しく、このあたりの水深は800メートルほどしかなかつた。大洋では数千メートルを越えることは珍しくないが、なぜかこのあたりだけは浅くなつているのだ。太古に島ができかけ浅くなりかけたが、結局は水面に頭を出すには到らなかつたのか、それとも大昔には島や大陸が存在したのが、大地震か何かで海中に沈没したか。学者たちは今でもさかんに議論を戦わせている。

ジリジリとベルが鳴り、壁際にある機内電話が呼んでいることに気がついた。駆け寄つて受話器を耳にあてるど、機長の声が聞こえてきた。

「乗員は救助した。そつちの具合はどうだ？」

「待ってください」長い電話線を引きずつて機体の一一番後ろへ行き、私は窓の外をのぞき込んだ。小さな丸い窓だが、海の様子は十分見ることができる。「波はOKです。十分クジラを降ろせます。今から後部ハッチを開けます」

「一人でやれるか？」

「やれると思います」

「すまんな。手伝えればいいのだが、こちらはお密さんが3人もいてな」

「様子はどうです？」

「ケガはしていない。機嫌は悪そうだが

「そうでしょうね」

「本当に助けは要らないんだな？」

「ええ、大丈夫です」

「よし」

受話器を置き、私は準備に取りかかった。

制服を脱いで水着に着替え、水槽の上に身を乗り出すと、チビ介が歓迎してくれた。私の興奮が伝わっているのだろう。尾びれをゆ

つくりと動かし始めている。

水温調整装置とろ過装置のスイッチを切り、私は後部ハッチを開き始めた。ウイーンといつモーターの低い音が聞こえ始める。後部ハッチは大きく広く、機体の幅いっぱいの大きさがある。開いてゆくにつれ、海の風景が目の前に広がってゆくのだ。風が吹き込み、身体にしぶきがかかり始める。

ハッチが開ききったところで私はワインチのスイッチを入れ、チビ介の入っている水槽をゆっくりと移動させ始めた。カマキリが卵を生むときのようにして、飛行艇の後ろから海面へむかって降ろしてゆくのだ。水槽が移動するにつれ重心がかたよるので、飛行艇の機首がゆっくりと持ち上がり始める。

水槽の底部はすでに水に洗われ始めている。波の音を感じることができるのは、チビ介がぐるりと目玉を動かした。

水槽を水に降ろし、門を開いてやると、チビ介はさつと海中に泳ぎ出た。せまい場所から自由になることができてせいせいしているという表情だ。冷蔵庫から引っ張り出してきた魚を一匹投げてやると、チビ介は一口でのみ込んでしまった。

次は私が潜水服を身につける番だった。機内には小型のクレーンがあり、私の潜水服をつるしている。丈夫な金属でできていて、重量が一百キロ以上あるとんでもないものだ。

スイッチを操作し、私はそれをゆっくりと水面へ降ろしていった。チビ介はもう潜水服に寄りそい、私が着込むのを今か今かと待っている。

深呼吸をして、私は海に飛び込んだ。すでに潜水服は完全に水中にあるが、主がないので、波を受けて海草のようにゆらゆらと揺れている。『ついばかりで、美しさのカケラもない代物だが、私は身につけるのが楽しみで仕方がなかつた。あれを着れば、私も海の生物の仲間入りをすることができるのだ。

不意に背中に触れられたことに気がついたが、優しい触れ方だから、振り向かなくても誰かはわかつてた。あの大きな額で、チビ介が私を押しているのだ。早く潜水服のところへ行かせようといふのだろう。

私は潜水服の中へ身体を滑り込ませた。ひんやりとした冷たさが肌に触れる。ヘルメットをかぶり、しつかりとネジをとめはじめた。その様子を、チビ介は楽しそうに見つめている。

私のヘルメットからは金属製の長いパイプが伸びている。空気が通るパイプなのだが、私がそれを手に取ると、チビ介はいそと頭を寄せてきた。その背中をたどり、チビ介の呼吸口に取り付けてある接続装置に私はパイプを力ちんと接続した。コックを開くと、チビ介の肺の内部にある空気がしゅっと飛び込んできた。水中では、私はチビ介から空気をもらつて呼吸するのだ。竜騎兵とクジラは一つの空気を分け合つて生きているのだ。

胸びれをぽんぽんとたたき、私はチビ介を前進させた。彼の巨的な首のまわりに渡されているベルトに手をかけ、身体のバランスを取りつた。

ゆづくりと回り込むようにして、チビ介は飛行艇の機首へと近づいていった。窓の向こうに男たちがいるのが見える。機長と副操縦士と、見慣れない制服を着た3人だ。この三人は体力と神経をすり

減らし、疲れきった様子に見える。それも無理はないと思つが。

おそらく機長たちはすでに三人から武器を取り上げていることだらうし、ヒトリ軍から応援も駆けつけつつあるのだ。ハマダラカ兵たちも、ここで騒ぎを起こすほどバカではないだろ？

片手を振り、私は機長たちに合図を送った。副操縦士が手を振り、口を大きく開けて何か言つたようだが、もちろん私には聞こえなかつた。チビ介に指示を送り、私は潜水を始めた。

ハマダラカ機の姿は、もちろんすぐに見つけることができた。ひどく奇妙な形をしているとはいえ、一人前の爆撃機なのだ。水中をただよつているのを見落とすはずがない。私とチビ介はゆっくりと接近していった。

爆撃機は本当にブーメランのような形をしていた。羽根を折りたたんだときのガの姿に似ていると言えなくもない。操縦室は不釣合いに小さく、遠慮して機体のはしにちょこんと取り付けてあるという感じだ。エンジンのことを思い出し、私は尾部へまわってみるとした。

機首にはもちろん、尾部にもプロペラなど影もなかつた。尾部にはただ見慣れない丸い穴が3つ開いているだけだ。機首のわきにある取り入れ口から空気を取り入れ、それをどうにかして勢いよく後ろから噴き出し、ロケットのようにして前進するかも知れないと思つた。これがジェットエンジンと呼ばれる新しい技術だと聞かされたのは、この作戦がすべて終わつたあとのことだった。

獵師に撃たれて墜落して、木の枝に足が引っかかつてしまつた鳥のように、爆撃機は逆立ちをするような形で水中をただよつていた。

深さ数十メートルのところで、沈むでもなく浮かぶでもなくじっとしているのだ。だがエンジンの排気口から小さな泡が、少しづつ水面へ向かつて立ち昇っているのが見えている。空気が逃げ、海水が機内を少しづつ満たしていきつつあるのだろう。この機体は、いずれ海底へ向かつて落下を始めるに違いない。

どうすることもできないまま、私は爆撃機のまわりをチビ介に何回か旋回させた。始めのうちはチビ介も興味を持つていたが、すぐにはあきてしまったようだ。食べることができないものに対しては、彼は関心を持ち続けることができないのだろう。最初の興奮がすぎて、正直に言うと、私もあくびをかみ殺すのに苦労を感じ始めた。

応援部隊が到着したのは一時間後のことだった。水中から見上げると、きらきら光る水面に飛行艇404のおなかの形がくっきりと見えているのだが、そこへ突然別の飛行艇の姿が混じったのだ。大きな三角形の波を起こして着水し、こちらへ近寄ってくる。それも一つではなく、同じものを3つ見つけることができた。404号ほど大型ではないが、海軍の飛行艇部隊だろう。これはかなり大きな作戦になりつつあるようだつた。

だが私は持ち場を離れるわけにはいかなかつた。正規の竜騎兵部隊が現れ、交代してくれるまではここにいなくてはならない。竜騎兵は船に乗つてやつてくるから、到着はまだまだ先のことだらう。

2時間に一度、空気を吸うためにチビ介を水面へ上昇させた。それ以外はまるで水族館の水槽の中のサメのように、同じ場所をぐるぐると回り続けるだけの退屈な仕事だつた。チビ介も退屈しているので、ときどきおなかの下にもぐりこんで、くすぐつて遊んでやらなくてはならなかつた。そうしながらも私は、目のすみでじつと爆

撃機を監視していた。

ゆっくりとしているが、しっかりした海流がここにあるようだつた。飛行艇たちの底部がだんだんと遠ざかってゆくのだ。すでに深度は100メートルを超えていたからもはや爆撃機の姿を見ることができず、水上の連中は気づいていないのだろう。だがそれは大きな問題ではなかった。爆撃機の位置は私一人が把握していればいい。

チビ介が一度目の呼吸をすませるころには、私はもう退屈でどうしようもなくなっていた。五分おきに腕時計をのぞき込んでいたが、針がほんの少し前へ進んでいるだけなのをそのたびに発見して、ため息をついた。だがそういう退屈も、いつまでも続くものではないのかもしれなかつた。

それはまるで、戸棚から物が落ちるときのように急激に始まった。予告もなく、爆撃機がするりと20メートルばかり下へ落ちたのだ。はつとしてそちらに身体を向けたが、何が起こっているのか理解するのに何秒かかかつてしまつた。

爆撃機の翼は左右に長く伸びている。飛び立つときの白鳥のような優雅な眺めだが、翼の先端に奇妙な形の部品を取り付けてあることに私は気がついていた。特殊な形のアンテナかと思つていたのだが、気流を整え、空気抵抗を減らすためのものだつたのかもしれない。中世の坊さんがかぶる帽子のような形のものが、それが突然本体から外れたのだ。

外れた部品は一旦は浮かび上がりかけたが、すぐに上下逆さまにひっくり返り、内部にあつた空気が泡になつて逃げ出してゆくのが見えた。

だがそれと同時に、もつと大きなことが起こつたのだ。爆撃機の内部に残つた空気を押さえつけている最後の砦とりでがあの部品だつたようなのだ。それが外れてしまつたあとには大きな穴が開き、驚くほど大量の空気がそこから噴き出し始めた。ゴボゴボいう泡の音が私の耳にまで聞こえてきたほどだ。

その空氣はあまりにも大量で、まるで上下逆さまになつた滝の水のように、水面へ向けてものすごい勢いで立ち昇つていつた。

私は思わず見上げていたが、のんびりしてはいられないことにすぐには気がついた。内部の空氣を失つて、爆撃機は本格的に落下を始

めるに違いない。

まったく思つたとおりだつた。まわりの海水を激しくかき回しながら、爆撃機は海底へ向けて進み始めたのだ。泡の噴き出しあはまだ続いている。いくらもたたないうちに、機内の空氣はすべて失われてしまうかもしない。

私は思わず下を向いた。爆撃機が旅立つていこうとしている方向だ。そして、私とチビ介がこれから追いかけていかなくてはならない場所もある。光の届かない真っ暗な深海で、深い井戸の底かいんクつぼの中をのぞき込んでいるときのような気がする。

深度が増して太陽の光が届きにくくなつてゐるせいで、爆撃機はもはや銀色ではなく、死んだ魚のように白くぼうつとして見える。あまり気持ちのよい眺めではない。だが私には選択の余地はなかつた。チビ介に合図を送り、爆撃機を追いかけ始めた。身体をひるがえらせ、チビ介はしなやかに向きを変えた。

真つ暗な降下を続けながら、私はチラチラと深度計を眺めていた。もちろん目盛りは次第に増してゆくのだが、思つたほど急なペースではなかつた。石ころのようにストンとではなく、少しづつくりとしているのだ。翼の先端から吹き出す泡はすでに止まつてゐるが、機内にはまだいくらか空氣が残つてゐるのかもしれない。

すぐに私のまわりは完全な暗闇になり、目に入るのは懐中電灯の黄色い明かりだけになつた。この暗闇の中でも、もちろんチビ介にはまわりの様子がよくわかつてゐるのに違ひなかつた。人間の耳には聞こえない種類の音波を発し、その反射具合で周囲の地形や障害物、他の生物の姿などを判断しているのだ。だからチビ介には、降下してゆく爆撃機の姿もはつきりととらえられているはずだつた。

私たちのはゆっくりと降下を続けた。降下率を調べ、海底まで何分かかるのか計算してみようとした。だが海底までの距離がわからないうことに気がついた。私が知っているのは800メートル程度だと、ついにすぎず、正確な知識とはいえないかった。

始めのうちはそうではなかつたが、見かける魚の数は次第に少なくなつていった。そしてとうとう、小型のサメが一匹懐中電灯の光の中に姿を見せたのを最後に、何一つ目にすることはなくなつてしまつた。深度計は600メートルを指している。爆撃機は降下を続けている。チビ介は平氣な顔で泳ぎ続けている。

懐中電灯の光の中に、海底の砂地が姿を見せ始めたときには、ほつとして私はヘルメットの中で息をついた。それに気づいたのか、目玉を動かしてチビ介が私を見たので、黒い滑らかな肌をぼんぼんとたたいてやつた。

砂におおわれ、海底は本当に砂漠のような眺めだったが、近づいてゆくにつれ、私は奇妙なことに気がついた。表面に輪郭がわずかに浮き出していたり、一部が顔を出していたりするだけなのだが、砂の下に何かが何十も何百も埋もれているようなのだ。

何だろうと私は目をこらしたが、爆撃機が海底に達したのはその瞬間だった。機首を砂にめり込ませ、あまり速い速度ではなかつたが衝突したのだ。ドオンという音が水中を伝わり、私はぎくりとした。チビ介はすでに速度をゆるめはじめている。

海底の砂をえぐり、一部を煙のように巻き上げながら、爆撃機は停止した。そのまま逆立ちをするように立ち続けたが、それも一瞬のことだ、すぐにめりめりと音を立てて倒れ始めた。

ピザのように平たい巨大な機体なのだ。それが倒れるときのこと
を想像してみてほしい。巨大な扇子のよんに海中に波を起こしたの
だ、波は砂をさらに巻き上げ、海底はほとんど何も見えなくなつた。
あまりの勢いだったので、砂の中に埋もれていたものまでいくつか
動かされ、水中を何メートルも舞つたほどだ。

懐中電灯を向け、私とチビ介はその様子をすべて見てていたのだ。
あたりを埋めつくすかのように砂の中に隠されていた物たちの正体
を私は一瞬で理解していた。一個や二個であれば、海底では特に珍
しい物体ではなかつた。だがその数の多さに私は驚いていたのだ。
それが懐中電灯の光が届く範囲を埋めつくしているのであれば、少
なくとも何千という数であるに違ひないではないか。

埋もれている物の正体を見て、チビ介が特にショックを受けてい
るようではないのは意外ではあつた。だがきっと種類が異なつてい
るからだろう。ということはつまり、この海底を埋めつくしている
骨は、大きさから見てクジラのものには違ひないだろうが、少なく
ともマツ「ウクジラ」のものではないのだろう。

砂煙があさまると、海底の様子をもつとよく見ることがができるよ
うになつた。爆撃機は、子供が置き忘れた帽子のように完全に上下
逆さまになつていて、普段あまり見えない腹部を上に向けているの
だ。エンジンを点検するためだろうが、大きなハッチのようなもの
がいくつか並んでいることに気がついた。

だがそんなことよりも、クジラの墓場を発見したことのほうが、
私をよほどぞくぞくさせていた。何世紀にもわたり、その存在が船
乗りたちの間でささやかれ続けてきたものだ。年を取つたり大きな
傷を受けたりしたクジラは群れを離れ、一人でその場所へむかうと

言われていた。

大洋の中心、深海のどこにあるともされていた。クジラたちはそこで死を迎える、太古からの先祖たちの間に混じり、しかばねをさらすのだ。私はその墓場を発見したのだった。身体の中を興奮が駆け抜けるのを感じないではいられなかつた。

爆撃機のことなど忘れてしまい、私は海底を見回し続けた。滑車をいくつも連ねたような形の背骨やアーチ型のろつ骨、頭蓋骨を簡単に見分けることができる。皮膚や肉は完全に失われ、すべて骨だけになつてしまつてゐる。

これがかつてはみな生きていて、海の中を駆けまわつていたのだ。私が生まれるずっと以前、それどころか最古のものは、人類が文明を持つようになる前からここに横たわつてゐるのだろう。思わずため息をつかないではいられなかつた。

だがチビ介は、すでに退屈を感じ始めているようだつた。チビ介はまだ若く、死など実感のわかないまだまだ先の出来事なのだろう。マッコウクジラの寿命は50年にもおよぶのだから無理はない。それにこれはマッコウクジラの墓場ではないのだ。何か別の種類のクジラの墓場なのだろう。

それがどういう種類なのか、もちろん私にもわからなかつた。骨や頭蓋骨を見るだけでクジラの種類がわかるような訓練など、私は受けたことがない。それは竜騎兵ではなく、動物学者の仕事だ。

懐中電灯をともし、私はまだ墓場を見回し続けていたが、興奮が収まつてゆくにつれ、やるべき仕事があることを思い出した。爆撃機が落下した正確な地点を水上の連中に伝えなくてはならないのだ。

降下を続けながら、途中の通過地点を私は海図上にメモし続けていた。だから爆撃機の落下地点もすでに海図に記録できていたのだ。これを水の上に持つて上がり、指揮官に見せれば私の仕事は終わるわけだった。

ほつとした気分になり、私はチビ介を水面へ向かわせようとした。クジラの胃袋は巨大だ。もうそろそろ空腹を感じ始めているころだらう。指先で肌に触れ、浮上するようにと私はチビ介に指示を出した。だが、そのとき奇妙なことが起じたのだ。

チビ介が私の指示に反応しないのだ。いつもならすぐにしておきくものが、なぜか身体を動かそうともしないのだ。

指示の出し方が悪かったのかもしれないと思い、私はもう一度繰り返した。だが結果は同じだった。チビ介はひれの先まで身体を緊張させ、ある方向へむかって注意を集中している。私の指示になど気づいてもいのうだ。

私はチビ介の瞳をのぞき込んだ。そして再び驚きを感じなくてはならなかつた。こんなに暗い海中であれば、チビ介の瞳孔はいつぱいに開いているはずだつた。だがそれがうんと小さくなつてしまつている。もちろんそれは一瞬のことであり、あつとう間に正常に戻つたが、次にチビ介は忙しく両手を前後左右に動かし始めるではないか。

チビ介は何かに対して強い警戒を感じているのだ。だがそれが何に対してなのかわからず、落ち着かせようと私はチビ介の胸に触れたが、心臓が高速艇のエンジンのように速く打つているのが感じられただけだった。

懐中電灯の光を最大に強くし、私は前方へ向けた。深海は透明度が高く、浅い海よりも遠くまで見通すことができた。やがて光の輪の中に、巨大な白い鼻がぼんやりと姿を現した。

もちろんまだ近くではなかつた。距離は200メートル以上はあつただろう。それでもあの大きさに見えるといふことは、とんでもなく大きなクジラに違ひない。

もちろん生きているクジラだ。種類は青クジラで、それは鼻の形と体色から見間違いようがない。だが私は、青クジラであれなんであれ、あれほど巨大な個体は見たことがなかつた。体長は30メートルどころか、40メートル近いだろう。皮膚は青みがかつた灰色だが無数に傷があり、そのせいでの巣がかかつたように白く見える。

再び肌に触れて、私はなんとかチビ介の注意を引くことに成功した。そのまま水中を降下させ、ほとんど腹ばいといつていいほどにまで海底へ近づかせた。

ゆつくりとだが、相手はまっすぐに近寄つてくる。あの大きさではオスということはないだらう。青クジラは、オスよりもメスのほうがよつぱり身体が大きいのだ。

もちろんあの青クジラは、私とチビ介の存在に気づいているに違ひなかつた。クジラは海中の様子を音で知ることができるわけだし、私は懐中電灯を点灯させているのだ。だがもう懐中電灯のスイッチを切るわけにはいかなかつた。もし切つてしまつたら、あの青クジラが次にどういう行動を取るつもりなのか、私は知る方法がなくなつてしまつ。

マッコウクジラと違ひ、青クジラは小エビを主な食べ物としている

る。あの大きな身体をそんな小さなもので支えているというのは不思議な気もするが、そもそも青クジラというのはあまり凶暴な動物ではない。少なくとも私はそう教えられていた。

爆撃機のまわりで、青クジラは旋回を始めた。海底に鼻を近づけ、まるで犬が匂いをかぎまわるときのようなしぐさだ。鼻を接触させるようなことはしないが、なにやらさかんに調べているようだ。その様子から、やつはひどく近眼なのではないかという気がした。

チビ介と同じように、そもそもクジラは爆撃機になど関心を示さないものだと思う。食べてもうまくはないからだ。青クジラの表情も始めはそういう感じだった。だがそれも、爆撃機の機首が海底を大きく掘り返し、仲間たちの骨を砂の上にさらし、いくつかを重みで破壊してしまっていることに気づくまでのことで、

クジラが怒りに震える瞬間というものを、私は始めて目にした。背中が盛り上がり、呼吸口のあたりが大きく緊張したようだ。だが怒りにまかせて貴重な空気を噴き上げてしまうことは、何とか理性が押しとどめたのだろう。頭を動かし、私たちをじろりと見た。

もしクジラ語が話せるのであれば、私はすぐに弁明を始めたことだろう。チビ介も手伝ってくれたに違いない。だがいにく、クジラ語がわかる者など地上には存在しない。青クジラの表情から私がなんとか理解したのは、墓場を荒らし、仲間たちの死体を冒涜した犯人はこの私であると思っているらしいということだった。

40メートル近い青クジラににらみつけられて、私だけでなくチビ介もすっかりおびえてしまっていた。尾を腹部に引き寄せ、赤ん坊のように丸くなろうとしている。私たちはジリジリと後ずさりを始めた。

青クジラまでの距離はもういくらもなかつた。懷中電灯に照らし出され、相手の様子をすみずみまで眺めることができた。

犬やネコなどと比べて、クジラは非常に大きな頭蓋骨を持つている。その内部にこれまた巨大な脳が収まっているのだが、この青クジラの頭の右側、少し斜めになつたあたりに何かが見えることに私は気がついた。

自然のものではなく、何か余計なものが引っかかっているようなのだ。クジラの皮膚にフジツボやモのようなものが生えているのはよくあることで、別に珍しくはない。だがこのクジラにあるのは、そんなものではなかつたのだ。

棒のような形をしていた。いや、杭くいというほうがいいかもしない。表面がモにおおわれているので木なのか鉄なのか材質はわからないのだが、少なくとも1メートル以上身体から突き出している。何十年前からある古いものようだ。

もちろん私はすぐに、捕鯨の際に漁師たちが使うモリを思い出していった。太くて長いヤリのようなもので、先端は鋭くどがらせてある。一度刺さると抜けないように、体内に入ると先端が開く構造になつたものもあると聞いたことがある。

だが小船をこぎ寄せ、人が手で投げてモリを打ち込んでいたのは何十年も昔のことだ。今でも捕鯨は行われているが、現代のモリは大砲のように火薬で発射されるようになつていて。もしあれが本当に漁師のモリだとすれば、何十年前からあそこに突き刺さつていことになるのだが。

そのモリの根元に何かがからみついていることに私は気がついた。

人間というのは、どんな場合にも好奇心を失わないものだと思う。仲間の墓を荒らされた怒りで体中をいっぱいにしている青クジラの前で、私はモリの根元の様子を観察しはじめていたのだ。

モリの根元にからみついているのはクサリだとすぐにわかった。通常はロープを使うものだが、あのモリにはなぜかクサリがくくりつけられていたのかもしれない。長いものではないが、しっかりと何重にも巻き付いている。そのせいで何十年たっても外れてしまうことがなかつたのだ。

だが次の瞬間、私はヘルメットの中であつと大きな声を上げてしまった。あのクサリが巻き付いて何十年間も放さずにいたものは、モリだけではなかつたのだ。モリと一緒に、クサリは人間の腕をも巻き込んでいた。

もちろんとつぐに骨になつてしまつているが、がつしりとした長い腕だ。おそらく漁師のものだろう。船の上からモリを投げたのではなく、クジラの背中に飛び乗り、全身の力を込めて突き立てたのかもしれない。

そう考えると、モリにロープではなくクサリがつながれている理由もわかるような気がした。何十年か前のある時期、このクジラはある男のすさまじい敵意と執念の対象となつたことがあるのだろう。

その男はもちろんすでに死んでいることだろう。海中で腕を引きちぎられては、生きていることはできまい。だがその執念のあかとして、相手の体に自分の腕を残したのだ。

その腕が現在まで残っているのは、もちろん偶然の産物に過ぎない。モリが抜けず、クサリも切れてしまわなかつたというだけのことだ。しかしあの青クジラはあの腕を勲章として、人生の最後の瞬間までその身に飾り続けるのだろう。

だが私のそんな空想も、不意に中断されてしまった。体中の筋肉をバネのように使ってチビ介が突然前に飛び出し、青クジラの鼻先をよこぎつて泳ぎ始めたのだ。

夢の中でさえ、あんなに恐ろしいものに追いかけられた経験は私にはなかつた。チビ介は全力で尾びれを動かし、私も必死になつてつかまつているのだ。振り返ると、幽靈のよつな白い巨大な顔がそこにある。

マツコウクジラやイルカなどと違つて、ヒゲクジラと呼ばれる連中は独特的の顔つきをしている。陸上動物などとはまったく異なるデザインセンスだ。進化の神はいつたい何を考えてこんな顔に作ったのだろうという気がしてくるほどだ。口の開き方でさえ他の動物とは異なり、まるでとがつたペンチか植木バサミのような動きをするのだ。そして口の中には歯など一本もなく、長いヒゲがカーテンのようにびっしりと生えているだけなのだ。

巨大な青クジラに負われ、チビ介と私は海中を逃げ続けた。爆撃機などとつくな見えなくなつてしまつてている。目の下には、クジラの骨が無数にうずまつて砂地がデコボコと続いている。

私たちは全力疾走を続けた。だが疲れを見せる気配はまったくなく、青クジラはぴたりと後ろにつけている。チビ介はときどき進路を左右に変えるが、あわてるふつもなくきちんとついてくる。青クジラが身体を揺らすたびに、白骨になつたあの腕もゆらゆらと動く

のだ。それがまるで「やあ」と手を振つてゐるかのよつて見えるではないか。

砂地が突然終わり、海底が岩肌に変わつた。角ばつた白っぽい岩で、小さなヒビが無数に入つてゐる。だがそれも少しの間のことでは、気がついたときには、私たちは何もない空間に向かつて勢よく飛び出してゆくところだつた。台地のような部分がガケになつて突然終わり、海底の谷が不意に顔を出したのだ。

だが谷といつても、これほどのサイズのものは陸上には存在しないかもしない。まるで落とし戸が開いたかのような暗闇が広がっているばかりで、私たちの下方にはまったく何もなくなつてしまつたのだ。

海図をたぐり寄せ、私は田をこらした。何枚かページをめぐらなくてはならなかつた。もちろん青クジラはまだ追いかけてきている。あの口を開け閉めし、私たちを飲み込まないまでも、手足の一本、ヒレの一枚でもむしりとつてやろうとこうのかもしれない。

爆撃機からはすでに数キロ離れてしまつてゐるに違ひなかつた。だが青クジラは疲れるどころか、追跡をあきらめる様子もない。私はチビ介のことが気になり始めた。すでにかなりの疲労を感じてゐるに違いない。もちろんそんな気配はまだ見せていないが、それほど必死になつて泳いでいるということなのだろう。

いくらチビ介でも、何時間も高速で泳ぎ続けることはできない。ところが青クジラのほうは、長距離ランナーとして知られている種類なのだ。これは何とかしなくてはならなかつた。

信号銃で青クジラの顔をねらい、引き金を引くことも考えはした

が、そんなものでは何の役にも立たないだろうとすぐに思い直した。しかし、もつと大きく重いものをぶつけてやれば、いくらやつでもひるむかもしない。

指示を出し、私はチビ介を水面へ向かわせることにした。すぐにいつことをきき、チビ介は鼻を上に向けた。

夜明けの空のように薄明るくぼんやりと輝く水面へむかって、私たちは上つていった。もちろん青クジラはぴったりとついてくる。見ていると再び口を開き、それがまるで二タリと笑っているように思えて、ぞつとしないではいられなかつた。

私は片田で深度計をにらんでいた。まわりはどんどん明るさを増し、たまたまいたイワシの群れの中央を突つ切つたときには、イワシたちは驚いて左右に分かれ、巣穴の中に不意に水が入ってきたときのアリたちのように大騒ぎをしていたが、気にしている余裕はなかつた。いつもであればチビ介も目を輝かせただろうが、彼にもそういう余裕はないようだつた。

水面が近づいてきた。しわの入つたシーツのよごに、もう波の様子を見分けることができるほどだ。再び指示を出し、私はチビ介を水面すれすれに泳がせた。

ベルトをつかみながらはい上がり、私はチビ介の背中へ移動した。私が何をしようとしているのか、もうチビ介は気がついていたのかもしれない。

接続装置に取り付き、私はチビ介の身体から空気パイプを引き抜いた。内部を空気が流れ、チビ介の肺と私の潜水服をつないでいるものだ。パイプが外されたことに気づき、チビ介は反射的に水面に

背中を出した。私の身体は太陽の光を浴び、波に洗われることになる。とたんに水の抵抗が増し、速度が落ち始めたので、のんびりしている余裕はなかつた。

パイプをほり出し、私は潜水服を脱いでいた。そしてとうとう潜水服から抜け出し、チビ介の胸のまわりを取り巻いているベルトにつかまりなおしたのだ。

強い水流と波に押され、潜水服は一瞬でチビ介の背中から滑り落ちていった。青クジラのでかい頭はそのすぐ後ろにあるのだ。ねらいをはずすことなどありえなかつた。

あんなに大きなクジラなのだから、少々潜水服をぶつけられたぐらいではどうということはないと思うかもしれない。だが竜騎兵の潜水服は金属でできた特別製のもので、重さは一百キロ以上あるのだ。そんなものが鼻先に命中して、平氣でいられる者はいない。

私は振り返り、攻撃の効果があつたかどうか確かめようとした。そして想像以上の結果を得て、声を上げて笑ってしまった。思わず背中をたたくと、「どうしたのだらう?」とチビ介がちらりと目を上げるのが感じられた。

潜水服が滑り落ちていった瞬間、青クジラは口を大きく開けていたらしい。そうやって再び私たちを威嚇するつもりでいたのかもしない。その口の中へ、潜水服はまともに飛び込んでいったのだ。

クジラが口を白黒させる様子を、私は生まれて始めて目にした。それほどうまい具合に、潜水服はすっぽりとはまり込んでいたのだ。潜水服は頭から飛び込んでいったので、金属製の脚が一本、やつのアゴの間から角のように突き出している。おまけに口の端からは空

氣パイプを長くだらんと引きずっている。まるでナマズのよつたな顔つきではないか。

あんなにおもしろい眺めは一度も見たことがないよつたな顔がする。声を上げて、私は笑い続けた。

だが勝利に夢中になつて、私は注意がおろそかになつていたに違いない。あつと気がついたときにはチビ介の背中の上でひざが滑り、あわててベルトをつかみなおそとしたのだが、それからも手が滑ってしまったのだ。

クジラの背中の上はつるつるしている。他につかまるものなどありはない。川の急流の滑りやすい岩の上にいるときのことを考えてみてほしい。足をすぐわれ、私の身体はそのまま流されていった。

マツコウクジラには、つかまることができるような背びれはない。だから私は一瞬で海に落ち、よくたたかれずにすんだものだと思うがチビ介の巨大な尾びれのわきを通り過ぎ、青クジラの口の中へまっすぐに飛び込んでいったのだ。

潜水服のせいで、青クジラは口を開じることができなくなつている。でもだからといって、その口の中へ飛び込むのが楽しくなるわけではない。チビ介の口の中なら、私はいつも田にしていた。田に一度、ブラシを持って入り、掃除をしてやるからだ。

プールの中であおむけになり、チビ介は口を大きく開ける。まるで飼い主に甘えるネコのようなしぐさだが、私は口の中に入つて掃除を始めるのだ。牛の角のようにとがった歯がずらりと並んでいるのはなかなかの眺めだが、口の中の皮膚はピンク色でやわらかく、新鮮なミカンのような張りと弾力がある。

だが青クジラの口の中はまったく違つっていた。チビ介の口は普通の犬やネコと同じような開き方をするが、青クジラの口の中にいる

と、まるで巨大なスプーンの上に乗せられているかのような気がする。おまけに頭上からは、すだれのように長いヒゲが垂れ下がっているのだ。巨大なツケヒゲのオバケともいう感じで、私は思わず口の奥をのぞきこんでみないではいられなかつた。

口からのどにつながり、その先は胃袋に達している。そこまで行くと私も消化されてしまつわけだが、口からのどへ通じる部分の直径は意外と小さく、どう間違つても私が呑み込まれてしまふことはありそうもなかつた。直径20センチもない穴でしかなく、青クジラは小エビを丸呑みにするだけだから、これでいいのだろう。

私が口の中に飛び込んできたことに気づき、青クジラは激しく暴れ始めた。

それは本当に大暴れという言葉がふさわしく、身体を支えるために、私は電車のつり革のようにヒゲにつかまらなくてはならなかつた。それで痛みを感じるのか、青クジラはさらに激しく暴れ始めたようだつた。

ドンと突き上げるような衝撃を突然感じた。青クジラの腹の下にまわり、チビ介が思いつきり頭突きを食らわしたのだらうと思えた。『その人間を今すぐ吐き出せ』といつもりなのだろう。

だがそれは逆効果だつたのかもしれない。おかげで青クジラは、私がチビ介にとつて大切な存在であることに気がついてしまつたのだろう。口を開けたままのしまりのない声だつたが、意地悪そうにヒヒヒと笑つたよつた気がした。

潜水服のせいで閉じることができないといつても、青クジラの上アゴと下アゴの間が私が脱出できるほど開いていたというわけでは

ない。ほんのせまい隙間だから、私は肩を通すことができなかつた。青クジラが潜水を始めたのは、そのときのことだった。

アゴとアゴの間からものすごい勢いで水が入り込んでき、空気など一瞬でなくなつてしまつた。光もなくなり、真つ暗になつてしまつた。

きつと青クジラは得意満面でいたことだろう。水にもぐれば私を簡単に溺死させてしまえると氣づいてしまつたのだ。だがその得意な顔も、数秒しか続かなかつたに違いない。

もちろん私にはそれを目撃することはできなかつた。後になつてわかつたことだが、チビ介は先回りをして青クジラの下方へ行き、口を大きく開いて、相手のやわらかい腹部に噛み付いたのだ。

口の中について、青クジラが痛みに身をよじるのが感じられた。このころになると竜騎兵部隊内でも検討され始めていたことが一つある。当初竜騎兵部隊は、海中での軽作業や偵察が主な任務と考えられていた。だがヒトリ海軍に続いてハマダラカ海軍や他の国々も竜騎兵部隊を創設するにいたつては、いざれ竜騎兵同士が海中で直接戦うという事態も想定しなくてはならなかつた。だからクジラたちにも、他のクジラと戦う訓練が施されるようになつっていたのだ。

そうでなくとも、チビ介のようなマツコウクジラは氣の荒い攻撃的な動物として知られていた。深海には大王イカと呼ばれる巨大なイカが生息していて、全長18メートルほどにまで成長するのだが、野生のマツコウクジラはこれを主な食料にしているのだ。マツコウクジラは、生まれつきケンカ慣れしているといつてもいい。それはあのどがつたキバを見ればすぐにわかることだらう。

それに比べて、青クジラは小エビを食べるだけのおとなしい動物だ。私たちが出会った個体は特別に凶暴なやつだが、本来青クジラはあまり攻撃に適した身体の作りにはなっていない。口の中にはすだれのようなヒゲが生えているばかりで、歯すら一本もないのだ。

チビ介のアゴがさらに強く青クジラの腹部を締め上げたようだ。苦しげに身体をねじり、青クジラは水面を目指した。

あつと気がついたときには、青クジラは海面に顔を出していた。水面を離れてロケットのように飛び上がり、そのまま棒高跳びの選手のように空中でぐるりと一回転したのだ。もちろん次の瞬間には水面へむかって落ちていったのだが、そうやってチビ介のキバを振りまわすという作戦だったらしい。

だがマッコウクジラのアゴの力を甘く見てはいけない。帆船時代、クジラ漁師たちは木製の小船でクジラに近寄り、手でモリを投げ込んでいた。そういう時、手負いのクジラから反撃を受けることもあつたそうだ。特にマッコウクジラはそれが激しく、大きな身体で小船に体当たりをし、真っ一つにしてしまうどころか、口の中で噛み砕いて細かな木片に変えてしまうことまであったそうだ。そういう目にあつた漁師たちの運命は想像に難くない。

だからきっとチビ介も青クジラの腹部を放してしまつようなことはせず、ともにジャンプし、からみ合つようにして再び落としたのだろう。すさまじい水しぶきが上がったに違いない。

クジラの口の中に閉じ込められたまま水上高く飛び出し、その後落下するというのは、一度と経験したいようなことではない。私はまわり、潜水服にガンガンと何度もぶつけられることになった。

青クジラが水に落ちた瞬間、あることが起った。青クジラは身体の右側を下にして落ちたのだが、すると当然、口の右側からは滝のような勢いで海水が流れ込んでくることになる。偶然だろうが、その流れが青クジラの口を上下に大きく押し広げることになったのだ。

気がついたときには、私は潜水服と一緒に海中にほうり出された。主のいない潜水服はすぐに沈んでいった。

だが青クジラは、私のことが憎くてたまらなかつたらしい。チビ介を腹の下にぶら下げたまま全身の力を使って方向を変え、私に迫ってきたのだ。チビ介は、私が海中にほうり出されたことにまだ気づいてはいなかつたのだろう。気づいていても、もちろん間に合わなかつただろうが。

だからあつと思つたときには、青クジラの巨大な身体が私めがけて突進してくるところだつたのだ。もちろん私はよけようとした。そして半分成功した。

あのでかい頭に正面からぶつかられることは何とか避けることができた。だが私は、突然腹部にぶい痛みを感じていた。

ケガや負傷による痛みではなかつた。それはなんとなくわかつていたし、私の血が海水を赤く染め始めているわけでもなかつた。青クジラに突き刺さっているあのモリに私の身体が引っかかっているだけだつたのだ。まるで学校の体育の時間に鉄棒競技をするときのように、私の身体は前向きに二つ折りにされ、モリの柄に乗つかつているのだった。

私の手か足の先が水中からちらりとでも見えたのだろう。青クジラの腹の下を離れ、チビ介が駆け上がってくるのが目に入った。チビ介の身体が水面を突き破り、私のすぐ隣に並ぶのには何秒もかかるないだろう。

青クジラが私をにらみつけていることに気がついた。もちろん私もにらみ返してやつた。その瞬間、クサリにからみつかれているあの白骨が再び目に入った。そして、その指に何かが輝いていたことに気がついたのだ。

私がそれに手を伸ばすのを見て、青クジラの顔色が変わったような気がした。だがこのときにはチビ介が私の隣に浮上し、あいさつがわりだらうが、青クジラの横腹に向けて一発体当たりをかましたところだつたのだ。青クジラは私の邪魔はしないことに決めたようだった。

白骨の指にあるものが小さな金の指輪であることに私は気がついた。やはり男物なのか大ぶりで、指のなかばにきちんとまつているのだが、押さえつけているクサリを動かして指から引き抜くのは難しい仕事ではなかつた。

指輪をポケットにしまい、私はモリを離れ、チビ介めがけてジャンプした。海中にドボンと落ちたが、すぐにチビ介が寄りそい、ベルトにつかまらせてくれた。

私をともない、チビ介はその場から泳ぎ去ろうとしていた。青クジラはすでに戦意を失っている様子だつた。背中を水面に突き出し、バシュツと大きな音と水しぶきを立てて不機嫌そうに息を吐き出しだが、それだけだつた。もう私たちを追つてこようとはしなかつた。

チビ介の身体につかまつて現場を離れながら、何度もポケットの上から触れ、私は指輪がそこにあることを確かめないではいられなかつた。

飛行艇たちがいる場所へはすぐに帰りつくことができた。さつきよりも飛行艇が一機増え、高速艇も姿を見せていた。その甲板に指揮官の姿を見つけ、私はチビ介を近寄らせた。私は甲板へ上がることを許可されたが、すぐに困ったことに気がついた。

「（）苦労だったな、竜騎兵」アップル大尉は言つた。「爆撃機は海底に着地したか？」

「はい」私は小さな声で答えた。水着のままなので、甲板にぽたぽた水をたらしている。

「では位置を教えてくれ。海図はどこだ？」

「それがその……」

「どうした？」

理由を正直に話すと、アップル大尉はあきれた顔をしたが、怒られたりはしなかつた。脱ぎ捨てた潜水服と一緒に、海図はどこかの海の底なのだ。

「それとあの……」

「なんだ？ まだ何かあるのか？」司令部へ送る報告の電文をメモ帳の上で作りながら、アップル大尉はじろりと顔を上げた。ポケットから取り出し、私は指輪みせた。細い金線でできてきていて、急流

の中の水草か、からみ合つた森のツタのような形をした古めかしいものだ。小さな宝石もはめ込まれていたのかも知れないが、今では失われ、小さなカップのような台座の跡だけが残っている。

「これがその指輪です」

「青クジラの背にあつたやつか？ 古いものか？」

「そう思います」

「ふうん」大尉は退屈そうな顔をした。「オレはアンティークには興味はない。戦利品として、おまえがもらつておけ」

「はい、大尉」

それでも大体の数字ではあるが私は座標を覚えていたので、ヒトリ海軍は数日後には爆撃機を発見することができた。私の大洋横断訓練はそのまま中止されてしまったわけだが、爆撃機の追跡で同等の仕事をしたとみなされ、同級生たちと一緒に卒業することができた。スミス伍長ではなく、私はスミス少尉になつたのだ。

私に言わせれば、海軍のお偉方たちがまたまたバカなアイディアを思いついたということなのだろう。正式の竜騎兵になつて配属先が決まつても、私は同僚たちと顔を合わせることはなかつた。直属の上司になる人が一度だけ書類を届けにきてくれたが、本当にそれだけだつた。

そのかわり私は荷物をまとめ、両親や友人たちに別れを言い、ロツク諸島へ向かう客船に乗り込んだのだ。

ロツク諸島とは、ヒトリ本土の沖合い150キロのところにある小さな島々のかたまりだ。島民もいるが人口は300を超えず、ヤギを飼うことと漁業以外に産業はない。灯台があつて整備する要員もいるが、島が一つでも存在する限り、そのまわり200海里はヒトリの海になる。魚をとううが何をしようが自由で、まったくそのためだけに存在しているような島だつた。

だがここで、またあのハマダラカ国が登場する。何を考えているのか知らないが、最近このロツク諸島の近くでハマダラカのものらしい船舶が目撃されるようになつっていたのだ。目撃者は島の漁師たちで、それがなんと潜水艦のシユノーケルが水上に突き出して走っているのを見たといつことだつた。

水上を走る普通の船と同じように潜水艦にもエンジンがあり、乗組員もいて、新鮮な空気を常に必要としている。だから潜水の中にも潜水艦はシユノーケルと呼ばれるパイプを頭上に突き出し、そこから水上のきれいな空気を取り込んでいるのだ。

漁師たちが目撃したのがこのシユノーケルらしいということなのだが、いさか信じられない話ではあった。こんな遠くまでやってきて、ハマダラカの潜水艦が何の用事があるというのだろう。何回か調査が行われていたが、ロツク諸島のまわりでは役に立ちそうな鉱石層も石油も発見されず、漁場として以外には何の経済的メリットも見出せなかつた。軍事的に見ても本土から離れすぎており、何の利用価値もないようだ。

だがそれでも、ヒトリ海軍が何の手も打たないというわけにはいかなかつた。あちこちからさんざんつかれ、重い腰を上げる気になつたのだ。しかし海軍もまじめに仕事をする気があつたわけではない。何かをやつたふりだけで、適当にお茶をにごすつもりでいたのだ。

そのにごじ方というのが「最新の装備を整えた竜騎兵を一名島へ派遣し、パトロールと警戒にあたらせる」というものだつた。そしてその仕事を命じられたのがこの私だつたといふわけだ。

私を乗せた客船は無事にロツク諸島に到着したが、チビ介はいかつた。まだ訓練校にて、明日、例の飛行艇に乗つてここへ運ばれてくることになつっていた。

カバンを持つて島の港に降り立ち、私はまわりを眺めた。島の風景は想像していたとおりのものだつた。島全体が白っぽい色をした岩でできいて、太陽の光を浴びてまぶしく輝いている。仕事のためよりも、休暇を過ごすためにやつてきたいような場所だ。

少しでも目立たなくするために、制服ではなく私服を着ていくようになると私は言っていた。私は、島に一軒しかない宿屋に宿泊することになつっていた。船着場から山へ向かつて通りを一本入つたところ

ろにあり、小さな一階建ての建物だった。

経営者の名はヒルといい、やせた中年の小男だが、気さくで親切そうな感じなので、一目見ただけで私は好きになつた。若いころはこの人も漁師をしていたらしいが、ある事故で身体を悪くし、やむなく陸に上がって、この宿屋を始めたのだそつだつた。観光地とはいえないが、釣り好きな人々の間ではよく知られた島なので、常に何人かが宿泊していて、私もその中に混じることになった。

島に着いたのは朝早くのことだったので、昼食をすませた後、私は散歩に出かけることにした。

驚いたことに、この島は一時間もあれば歩いて一周できるほどの大さしかなかつた。散歩の結果わかつたのは、小高い山が中央に一つあるが、それ以外は町が一つとあとはオリーブや松の森がチョロチョロとあるだけのちっぽけな岩の塊でしかないということだった。

翌日、島にチビ介が到着した。小さなボートを借りて海に出て、私は待ちかまえていた。

大きな音と水しづきを立てて、飛行艇は着水した。後部のハッチが開き、チビ介は海の中におどりでた。すぐに私を見つけ、鼻を押し付けてくるので、ボートがゆらゆらと揺れるほどだった。

私がボートをこぎ始めるとき、もちろんチビ介はついてきた。島のはずれに今は使われていないボート小屋があり、私はそれを借り受けた。以前は漁船が入れられていたものだが、内部は広々としていて、チビ介でも身体を伸ばすことができた。すでに私の潜水服も運び込まれ、小型のクレーンや潛水服の整備に使う道具類も備え

付けられていた。これから何ヶ月かの間、ここが私の活動拠点になるわけだった。

きちんと時間を決めていたわけではないが、午前と午後の二回、私はチビ介を連れて海に潜ることにしていた。海図は渡されていたが、海底の地形について詳しいものではなかつたので、自分で少しずつ書き加えていった。

島と同じように、このあたりの海底も一面が白っぽい岩ができる。平らな岩床がどこまでも続いている。

『潜水艦』を目撃したのは5日目のことだつた。海に潜つていないときには目撃者たちを訪ね、私は話を聞いてまわつていた。その結果わかつたのは、もし本当にハマダラカの潜水艦であるとすれば、おそらくローレライ型潜水艦だろうということだつた。漁師の一人の言葉が決め手になつたのだ。

「あの潜水艦には、くさきの部分に小さな羽根のようなものがあつたよ」

この漁師は真夜中、明かりを消して海面に浮上していた真っ黒な潜水艦ともう少しで衝突してしまうところで、あわてて自分の船のかじを切りながら、航行灯を反射して相手の姿がぎらりと光るのを見たのだそうだつた。

くわきに小さな翼のようなものがあるということから、私はすぐにローレライ型潜水艦を連想したのだ。

ローレライ潜水艦は、ハマダラカが竜騎兵の輸送や支援に用いていたものだつた。クジラを出し入れするために、くさきがワニの口

のように大きく開くように作られている。そのせいでへさきが重く複雑な形になり、安定性が失われたのでこの小さな水中翼を追加したのだろうとヒトリ海軍内部では解釈されていた。最新型の潜水艦ではなく、足も遅いが、航続距離の長い面倒な相手ではあった。

だが一つだけいいことがある。航続距離を伸ばすために燃料タンクを大きく取ったので、もともと広くもない船内はさらに余裕がなくなり、クジラは一頭しか積み込むことができないのだった。

漁師たちの話から、この海域にいる敵潜水艦は一隻だけだと思われた。ということは、このあたりにいる竜騎兵は私を含めて二人だけだということになる。

そのローレライを、私はこの島へ来て五日目の夜に目撃したのだ。島の裏側には町が存在せず、住民も家もまったくなかつた。小さな岬があり、ナイフのようにとがつて海に突き出し、よい目印になつた。そこが合流地点としてあらかじめ決めてあつたのだろう。浮力を調整してローレライは水中にたたずみ、待機していたのだ。

夜の海中なのだから、もちろんその姿など見えはしない。だがローレライは船体の下部に強力なライトを備えていて、まるで灯台のようにゆっくりと点滅させていた。

このライトはカバーをかけて、水上からは光が見えないようにしてあつたが、水中にいる私とチビ介にはもちろん見ることができた。300メートル離れていても田に入るほどで、味方の竜騎兵を呼び寄せるための目印なのだろう。ということはハマダラカは、ヒトリがこの島に竜騎兵を配置したことをまだ知らないのかも知れなかつた。

水中に身を隠したまま、チビ介と私は待ち続けた。あの潜水艦はソナーを使用しているに違いないから、音を立てるわけにはいかなかつた。熟練したソナー手は、クジラの鳴き声もすぐ聞きつけてしまうだろつ。もちろんチビ介はむやみに鳴かないよう訓練されているが、泳ぐときにしてる水音までは防ぎよつがない。

私は腕時計をのぞき込んだ。さつきチビ介が水面で息を吸つてから15分たつている。次の呼吸は1時間45分後だ。それまではここに潜み続けることができる。チビ介を海底に腹ばいにさせ、私はそばに寄りそい、耳をすませた。

何かが接近しつつあるとチビ介が教えてくれたのは、1時間後のことだつた。そつと胸びれを伸ばし、私の腕に触れたのだ。

私は顔を上げ、前方を見透かそうとした。潜水艦は同じ場所にて、ライトも同じように輝き続けている。だが突然、その光の手前を何かが横切るのが目に入った。

チビ介の胸びれにそつと触れ返し、私は前方を見つめ続けた。しかしそれ以上は何も見ることができなかつた。そのかわり、ごく小さく低いモーターの音が聞こえはじめた。きっとローレライが船首のハッチを開こうとしているのだろう。そして竜騎兵とクジラを収容したのか、再びハッチが閉じる気配があり、すうっとライトが消え、海の中は真っ暗になつてしまつた。

敵の竜騎兵の姿を私がこの田で直接見ることになったのは、一日後のことだった。昼間の海を泳いでいたのだが、突然チビ介が立ち止まり、ヒレを動かすのをぴたりとやめたのだ。何だろうと思って瞳をのぞき込んだのだが、次にチビ介は、身体を動かさないままゆっくりと海底へむかって沈み始めるではないか。もちろん私も一緒に下降してゆくことになる。

海底に着き、チビ介は海草の中に身を隠した。私も同じように、チビ介の隣に腹ばいになつた。

チビ介は、聴覚が特別鋭いようだつた。考えてみれば私との出会いもそうで、ゼノンが歌う歌を聞きつけ、きっと何キロも離れたところにいたのだろうが、好奇心に駆られてやってきたことがきっかけだつたのだ。

それ以来機会があるごとに注意してみると、いつになつたのだが、竜騎兵部隊にいるほかのクジラたちと比べても、チビ介の耳は並外れて優れているようだつた。あるときなど、一度耳にした船の音もチビ介は絶対に忘れることがなく、それどころか敵と味方の区別まできちんとつけて記憶しているのではないかといつ氣までしてきたほどだつた。

何も疑う気にならず、私はチビ介の隣に身を横たえ続けた。だが何も起こらない。耳をすませ続けたが、何も聞こえはしなかつた。

田の前の海底の砂地に、突然小さなカニが現れた。細長い手足があり、イチゴのように赤い色をしたきれいなカニだ。だが何を思つ

たのか、私の身体の上に登り始めるではないか。じつと動かすにいる私を岩と間違えたのかもしれない。

そつと手を伸ばし、潜水服から払い落とそうとしたのだが、そのとき何かの影が目に入ったので、私の手は動かされないままになつた。

数十メートルの距離があり、細かいところまでは見えなかつたが、水中を行く人影だつた。明らかに竜騎兵で、私と同じように潜水服を身につけている。チビ介よりは小型だがクジラを引き連れ、特に緊張した様子もなく、のんびりと泳いでいる。

クジラの種類は見間違いようがなかつた。シャチだ。

クジラの一種で、黒い身体に白い模様がいくつかある。飼いならすことは可能だが、あまりにも気が荒いので、ヒトリの竜騎兵部隊では一頭も飼育してはいなかつた。

あのシャチの背中からも、もちろんチビ介と同じように空気パイプが伸びていて見える。そして、シャチを使つている竜騎兵といえばこの世に一つしかなかつた。ハマダラカ海軍だ。

シャチの姿を見て、私はチビ介の行動の意味が理解できたような気がした。シャチは肉食動物で、クジラを襲うことがあり、あまり顔を合わせたい相手ではないのだろう。海草の中に隠れてやり過ごすことができれば、それに越したことはないのだろう。

チビ介と一緒に身を潜めながら、私は眺め続けた。ハマダラカ竜騎兵が手に大きな海図を持っていることに気がついた。ヒトリ海軍が用いているものと同じように防水紙で作られ、念のためさらに金

属製のケースに収められている。

海図にチラチラと田を落しながら、ハマダラカ兵は何かを探している様子だった。さかんにキヨロキヨロして海底を眺め、ときどきシャチを立ち止まらせる。だがお田当てのものがどうしても見つからず、いかにも当惑しているという感じだ。潜水服を着ていなければ、頭をぼりぼりとかいでいるところだろう。

何を探しているのだろうと、私は想像をめぐらせ始めた。その後も何分間かハマダラカ兵は成果のない搜索を続けていたが、やがてあきらめ、どこかへ姿を消してしまった。

宿屋の食堂で食事をしながら、私は考え「」とをしていた。

ついさっき島の郵便局を訪ね、司令部に向けて電報を打つたところだった。あて先は個人名にしておいたし、暗号を使った電文なので、途中で誰かが盗み読んでも、何でもない普通の通信文にしか見えないだろう。私は、漁師たちの噂話が真実であること、ハマダラカのローライ潜水艦と竜騎兵を目撃したことを連絡しておいたのだ。

「どうした？　何を考え込んでいるんだね」

突然話しかけられ、私は顔を上げた。ヒルが私のカップに「コーヒー」をついでくれようとしていた。もちろんヒルは私が竜騎兵であることを知っている、身元もしつかりした人物のようだつた。だから海軍も信用して、私をここに宿泊させているのだろう。そうなると、この島の中で信用できるのはこの人ひとりであるような気がしてきた。

まわりのテーブルを見回したが、いるのは私一人で、誰かに話を聞かれる心配はなかつた。

「あのね」私は話始めた。「詳しいことは話せないのだけど、変な連中がこの島のまわりをうろついているのは事実なの。ただその連中が何をねらい、何をしようとしているのかがわからない」

「それはつまり」「咳払い」^{せきぱい}をし、ヒルはイスの一つに腰かけた。「スパイのような連中かね？」

「まあそんなものね」私は微笑んだ。

「ふうん、スパイねえ。しかし探る値打ちのある秘密が、こんなちやちな島にあるものだらうかねえ」

「海軍の秘密基地なんかはないわよ。私が教えられていないだけかもしれないけれど」

「基地なんかがあれば」ヒルは笑った。「島全体が軍人の姿であふれて、この店も大繁盛するんだがね」

「そうね」

「そういうえば以前、オレがまだ子供だったころだが、この島が人でいっぱいになつたことがあつたよ」

「どうして？」

「島の連中は冗談交じりに『ゴールドラッシュ』と呼んでいたがね。この島のどこかに海賊の金塊が隠されているという噂が立つたことがあるのさ」

「金塊？」

「海賊スパークって知っているかい？」

「名前だけは聞いたことがあるような気がするわ」

「一時期、ヒトツの海を荒らしまわっていた男さ。まだ帆船の時代

だつたが、子分を引き連れて船をおそい、金目の物をじつそり奪い、乗っていた者は海に突き落とし、船は火をつけて燃やした。そうやつて10年以上悪事を続けたのだが、ついに捕まつてギロチンにかけられた。その隠れ家も発見され、捜索されたが、どこに隠したのか財宝など「イン一枚見つからなかつた」

「それがこの島のビックに隠されているところの?」

「そうちらしい。噂が広まり、何百人もがこの島に押し寄せた。手に手にスコップを持つてね」

「でも財宝は見つからなかつたのね」

「やつれ。埋まっているかビックもあやしことオレは思つがね」

「隠し場所の手がかりはないの?」

「何もなかつた。だからゴールドハンターたちは、島中をあてずつぽづに掘り返したものさ。もちろん何も出てきはしない。騒ぎは3ヶ月ばかり続いたかな。そのうちにあきらめて、みなビックへ行つてしまつたよ」

「本当に何の手がかりもなかつたの?」

私がそう言つとビルは見つめ返し、ともおかしそうに笑つた。

「それについても、噂はあることはあつた。なんでもスパーク船長は、宝の隠し場所を解く暗号を金の指輪にきざみつけていたというのだよ。そして、その指輪をどこに隠したと思つね?」

「さあ?」

「ただの作り話だとしてもひどい話さ。スパーク船長は自分の腕を切り取り、指にその指輪をはめさせ、クサリで縛り付けて、クジラの背中にモリ」と打ち込んだのだとか。だが何十年も前のことだ。本当のことだつたとしても、そのクジラはとっくに死んでいるさ。財宝の隠し場所を記した指輪は今ごろ、クジラの骨と一緒に広い海のどこかに沈んでいるに違いないとオレは思つね」

きつかけはまったく偶然の出来事だった。ある日の夕食どきにヒルの漁師仲間たちが店に集まり、なんとなく昔話が始まつたのだ。この島の古い時代の漁業に関することで、当然ヒルがまだ漁師をしていたころのことも含まれていた。そのうちに一人が言つたのだ。

「ヒル、あの写真をもつてこいよ」

ヒルはすぐに応じた。奥の部屋へ姿を消したが、額に入つた写真を持つて戻ってきた。横長の大きなもので、大切そうにしている。仲間たちがいるテーブルの中央に置いた。

私も少しのぞき込んだ、古い写真で、小さな漁船が写つている。島の近海で撮影されたもので、ヒルを含めて数人の漁師が甲板の上に並んでいる。これが若い時代のヒルだと指さされて、私は「へえ」と思った。今と同じように小柄だが若々しく、リスのようにすばしつこい感じがする。今と違つてヒゲを生やしていないのが少し変な感じだ。

「ふうん…」私は何か言おうとした。だが言葉はそこで消えてしまつた。私は、写真の背景に写つてゐる物に目を奪われていたのだ。

昔話に夢中で、男たちは私の様子には気がついていなかつただろう。彼らの話し声に負けないように、私は少し大きな声を出した。「ねえ、ここに写つてゐる岩は、ずいぶんおかしな形をしているのね。三角形をして、まるで三つ子みたいに仲良く並んでいるわ」

ヒルが振り返つた。「ああ、それは三角岩といつてや。奇妙な眺

めだらう？　でも、それがどうかしたのかい？」

「ううん」私は首を横に振った。「ちょっと変わっていると思っただけよ。この岩は今もあるの？」

「あるとも。岩の形なんて、何十年たつても変わるもんじゃないからね」

「どこにあるの？　見にいってみたいわ」

ヒルと男たちは笑い始めた。「物好きなもんだねえ。行つても何もありはしないよ。釣り場でもないしな」

それでも男たちは、三角岩のある場所とそこへ行く方法を教えてくれた。きちんと記憶するために私はひどくまじめな顔をしていたに違いないが、少しアルコールが入り始めている男たちは何も気がつかなかつたようだ。ヒルだけは少し不思議そうな顔をしていたが、何も言わなかつた。

この夜、私はなかなか寝付くことができなかつた。三角岩のことばかりが頭に浮かんだ。食堂から部屋に戻つてきて、すぐに私物を引っかきまわし、私はスパーク船長の指輪を引っ張り出していた。

この指輪は金線を編んで作ったようなデザインで、網のよつに透けており、目の前へ持つていくとそのむこうの景色が透けて見える。表面の模様はさらさらとして水草のようなのだが、その中に似つかわしくない三角形が3つなぜか刻み込まれていてそこに私は気がついていたのだ。さつき写真で見た3つの岩とよく似たほぼ正三角形の形だ。あの岩とこの指輪の間には何か関係があるのではないかとういう気がした。

翌朝日が覚めると、すぐに私は出かけた。水の上の仕事だから、チビ介を連れていくわけにはいかなかつた。小さなボートに乗り、私は一人で海へこぎ出た。

波は静かで、ボートをこぐのは難しくなかつた。海岸線に沿つて、私は進んでいった。白い岩でできた島は、朝日の下できらきら輝いている。

漁師たちが言つていた場所に近づくと、三角岩が見えてきた。岩たちは互いに50メートルばかり離れているので、まるで舞台の上の俳優のように、一人ずつ私の前へ現れてあいさつでもしてくれている感じだ。

もちろん私はすぐに指輪を取り出した。田の前にかざし、例の3つの模様と、遠くに見えてくる岩たちをぴったりと重ねてみようとしたのだ。

だが、なかなかうまくいかなかつた。ボートが波でゆらゆら揺れるせいもあつたが、しばらく無駄な努力を続けて、どうやら自分の位置が悪いせいだとやつと気がついた。どこか正しい場所に立てば、きっとあの岩と指輪の模様をぴったり重なることができるに違いないといふ気がした。

それはどこなのだらう。指輪をしまい、私は海の上をキョロキョロ口見回した。

この島の海岸線は岩だけで、砂浜などほんの少ししかない。ここも例外ではなく、岩だらけの水きわはノコギリの刃のようにギザギザしている。それだけではなく、陸上から転がり落ちてきた岩も

たくさんあり、水中に取り残されて、ザバンザバンと波を浴び続けている。

その何十メートルか沖合にも岩の塊がいくつもあり、少し途切れ途切れではあるが、まるで恐竜のしつぽのように長く伸びている。あの岩の上に立てば、私が探している場所も見つかるのではないかとうつ気がした。

ボートをつけるのに少し苦労した。それでも最後には岩の上に上陸し、ボートのロープもきちんと結びつけることができた。

岩の上を歩き回り、求める場所を見つけるのに長い時間はかかるなかつた。縦横1メートルほどしかないせまいものだが、なんとかく平らになつた場所があり、そこに立つて指輪を取り出すと、まさにそのとおりだつたのだ。岩と指輪の模様を三つともぴたりと重ねることができ、ここがその場所に違いないと思えた。

だが私は、少し当惑を感じてもいた。スパーク船長が意図した場所がここだというのは間違いないだろう。でも肝心の財宝はどこに隠されている?

もちろん私は自分の足元を眺めた。しかし巨大な固い岩盤にすぎず、穴を掘ることなどとてもできそうにない。何かの道具を使つてなんとか穴を開けたとしても、それを埋め戻したような跡も見られない。私はわけがわからなくなってしまった。

私は岩の上に座り込んだ。ひとけのない島の裏側だが、もし私を見ている人がいたら、何をしているのだろうときつといぶかしんだことだろ?。

がつかりして、私は岩の上に座り込んでいた。まわり中に波が押し寄せ、音を立てている。まるで演奏会の前に楽団の演奏者たちが思い思いに楽器のチューニングをしているかのような感じだ。私はその真っただ中にいた。

だが、いつまでここにいても仕方がない。私は宿屋へ帰ることにした。立ち上がり、最後にもう一度といつもりで指輪を取り出し、皿に当てた。

指輪の模様と3つの岩はたしかに一致している。今では失われてしまっているが、飾られていた宝石がまだあれば、その眺めに興をそえてくれることだらう。どんな色の宝石だったのかは知らないが、台座に座って輝き…

突然私は気がついた。その宝石の位置が財宝の隠し場所を示していたのではないか？

指輪から宝石は失われてしまっている。だが台座の跡は残っているから、宝石があつた場所は今でもちゃんと知ることができます。

片手だけを使って、私は指輪を透かし見続けた。だが困ったことに、宝石の台座は陸上を示しているのではなかつた。何度見直しても水中の一点を指しているだけなのだ。

私の真向かいには大きな白い岩の壁があり、その水面下の部分を示しているのだ。きっと水深十メートルほどのあたりだらう。しかし、あんな場所に財宝が隠されていたりするものだらうか。本や物語によくあるように、財宝というのは陸上のどこかに穴を掘つて埋められているものだとばかり思つていたのだが。

だがこういう結果なのだから仕方がない。あまり気は進まなかつたが、私は水中のあの地点を調べてみることにした。しかし今日はもう無理だらう。すでにかなり疲労しているし、午後にはチビ介の様子を見にいかなくてはならない。

私があの白い岩壁の下を調べることができたのは、翌日のことだつた。朝早く宿を出て、私は船小屋へ向かつた。だがささいだが、奇妙な出来事にこのとき出くわしたのだ。

私は船小屋の扉を開けようとしていた。南京錠があるのだが、キーを差し込もうとして、足元に小さなコインが落ちていることに気がついたのだ。

もちろん私は拾い上げた。本当に小さく、親指の先ほどしかないものだが、色から見て間違いなく金貨だらう。古びているので模様は消えかかっているが、何とか年号は読むことができた。

驚いたのは、それが200年も前のものだったことだ。汽船も飛行機も存在せず、海の上には帆船しか走つていなかつた時代だ。

誰が落としたコインなのか、見当もつかなかつた。船小屋はひとけのない場所にあり、そばには家などもなく、見回しても人影一つ目に入らなかつた。コインをポケットに入れ、私は小屋の扉を開けた。水面から顔を出し、噴水のように水をピュッと噴き出して、すぐにはチビ介が迎えてくれた。

そのあと潛水服を身につけ、私はいつものようにチビ介を連れて出かけたのだ。だが途中で道に迷い、現場についたのは日が高くなつてからだつた。

チビ介を立ち止まらせ、背中に登つて波の上に顔を突き出し、私は眺めた。たしかに昨日と同じ場所だ。三角形の岩が3つ見えるし、あの岩壁も真正面にある。岩に接触してチビ介がケガをしないように気をつけながら、ゆっくりと前進を始めた。

波打ち際ではあるが岩壁の前は水深が深く、波も静かだった。思つていたよりも簡単にチビ介を進めることができた。

水の上と同じように、岩壁は水中にも深くまっすぐ伸びていた。まるで窓のない巨大なビル壁のような感じだ。近くへ行き、そつと手を触れることがってできそうな気がする。

一番底の部分で、岩壁と海底は直角に交わっている。見下ろすとその近くに小さな洞窟のようなものが口を開けていることに気がつき、私ははっと息をのんだ。

岩の性質のせいでの、この島には天然の洞窟がいくつもあるという話は私も聞いていた。その一つがあそこにも口を開けているということなのだろう。いつからあるのかは知らないが、人類が生まれる前から存在しているのは間違いないだろう。

チビ介に合図を送り、私はさらに深く潜らせた。波が岩にぶつかる音がドンドンドン^{たいこ}と太鼓のように聞こえ続けている。見上げると、岩場に沿つて白い泡が、カーテンのように見渡す限りどこまでも続いている。

チビ介は降下を続け、私たちは洞窟の内部をのぞき込むことができる場所までやってきた。洞窟の中は暗く、ほとんど何も見えなかつた。手を伸ばし、私は懐中電灯のスイッチを入れた。

黄色い光が、さつと洞窟の中を照らした。だがそこに浮かび上がったものは、私の予想とはまったく違っていた。

最初に見えたのは、崩れてほとんど洞窟をふさいでしまっている何百もの岩のカケラだった。大きいのも小さいもあるが、大きなカケラは馬の胴体ほどもあり、とても私の力では動かすことができないだろう。割れ目はギザギザして新しく、海草やサンゴのたぐいも生えてはいない。「よく最近崩れたものなのだろう。

懐中電灯を動かし、もう一度眺め直したが、やはり洞窟は完全にうずまつてしまっている。だがその次に目に付いたのは、もっと奇妙なものだった。大きなシャチが一匹、洞窟の床に長々と横たわっているのだ。その背中に金属製の長い空気パイプが接続されているのが見える。

チビ介がビクンと緊張するのが感じられたが、私は頬に触れて落ち着かせた。やはりシャチは身動き一つしない。

シャチの背中から伸びた空気パイプは、岩のガレキの下に消えている。うずまつてしまって、その先がどうなっているのかはわからない。だが決まっているではないか。あのパイプの先にはハマダラカの竜騎兵がいるに違いない。この洞窟の内部を調べていたときに、突然の岩崩れに襲われてしまったのだろう。岩の下敷きになつて、逃げるどころか身動きも取れなくなつてしまっているのだ。あるいはすでに死んでいるのかもしれないが、確かめる方法はなかつた。

チビ介から離れ、私はそつとシャチに近寄つた。パイプが岩の下敷きになつたことで、こいつも身動きができなくなつているのだ。肺の中の空氣を使いきり、もう死んでしまっているかもしれない。

心臓の鼓動を確かめたくても、私の潜水服はそういう纖細な仕事ができるようには作られていない。シャチの胸のあたりにそつと触れてみたが、鼓動を感じ取ることを期待していたわけではない。だが、かすかだがシャチが目を開いたではないか。ひどく弱々しいが、まだ確かに生きているのだ。

急いで水面へむかえという指示を突然出されて、チビ介は驚いていたかもしれない。だがちゃんとということを聞いてくれた。水面へ行き、波の上に呼吸口を出させ、私は精一杯息を吸わせ始めた。イビキのような音を立てて、チビ介は勢いよく空気の出し入れを始めた。

陸上の動物よりも多くの酸素をクジラは血液の中にたくわえることができる。潜水中には、不必要的臓器の代謝をぎりぎりまで抑えることができる。そうやってクジラやイルカは、水中に長くとどまることができるのだ。

チビ介が空気を吸い続けている間に、私は潜水服を脱ぎにかかっていた。後のことなど気にせず、ぽんぽんネジを外していく。空気パイプは、チビ介の背中からすでに引き抜いてやっている。潜水服を水中に投げ捨て、ベルトにつかり、再び「潜水せよ」という指示を私はチビ介に与えたのだ。

さつきと同じ場所で、シャチは同じ様子で横たわっていた。私が背中に取り付くと再びかすかに目を開けたが、それ以上の反応はなかった。

敵国ではあるが、ハマ・ダラカの竜騎兵部隊で使われている接続装置の操作方法は私も学んでいた。何も迷わずに、シャチの背中から空気パイプを外してやることができた。

気がつかないのか、シャチは数秒間何の動きも見せなかつた。私が背中をパシンとたたいてやると、自由になつたことにやつと気づき、最後の力を振り絞つて水面へむかって泳ぎ始めた。そうやつて何十分ぶりかの空気を吸うことができたのだろうが、見送つている暇は私にはなかつた。ハマダラカ兵の空気パイプを手にしたまま、合図をしてチビ介を呼び寄せたのだ。

チビ介はおとなしくいうことを聞いた。岩崩れのすぐそばまでやつてきて、海底に腹ばいになつたのだ。手にしていたパイプを、私はチビ介の背中の接続装置にパチンとつないだ。口ツクを開くと、岩の向こうにいるはずの竜騎兵にむかつて空気の供給が始まつたはずだ。まだ生きていればだが。

「何をしているのだらう」とチビ介が不思議そうな顔で見ているような気がしたが、もう何をする余裕も私にはなかつた。私の息もすでにしきかけていたのだ。

海底をけり、私は水面を手指した。水面に顔を出させてほつとしたが、シャチの姿はもうどこにも見えなかつた。あれだけの目にあつたのだ。あのシャチが一度と人間には近づかないことに決めたとしても、私は責める気にはならなかつた。

それはそつと、岩の下のハマダラカ兵とチビ介のことだ。チビ介は一時間息を止めたままでいられるから急ぐ必要はないといつても、やはりあせりを感じないではいられなかつた。

水面を泳ぎはじめ、私は岸へ向かつた。岩だらけの海岸だから上陸できる場所を探すのに少し手間どつたが、とうとう上陸することができた。両手で岩の出っ張りに取り付き、自分の身体を引き上げ

たのだ。ありがたいことに、すぐ向こうに小道が見えている。それを目指して私は駆け出した。

ひとけのないあたりだが、幸いにもすぐに人の姿を見つけることができた。オリーブ畠があり、木の世話をしている男の姿を見つけたのだ。ハシゴをかけて枝に取り付き、ハサミを手に何かをしている。すぐそばの塀に自転車が立てかけてあることに気がついた。

「おじいさん」

駆けていきながら、私は精一杯大きな声を出した。

男は頭がはげ、ヒゲも真っ白になっていたが、私の声を聞きつけて振り向いた。私の水着姿に驚いた様子だったが、胸に描かれる海軍のマークにすぐに気がついたようだ。

「何だね、軍人さん」

「緊急事態なの。その自転車を貸して。岩崩れが起きて人が下敷きになった。町から人を呼んでこなくちゃならないわ」

「それはどこで起つたんだね？」

「IJの下の海岸よ。おじいさんには見つけられない場所だわ。じゃあ自転車を貸してね」

「ああ、それはかまわんが…」

老人の言葉を最後まで聞かずに、私はハンドルに手を伸ばしていった。車体の向きを変えてさつとまたがり、坂道を駆け下つていった。

帆船の時代にはこの島は重要な航路の中継基地であり、嵐のとき

の待避所でもあつた。町は小さな入り江に面していて、山の影のくぼみのような場所にある。ずっと下り坂が続き、私はほとんどペダルをこぐ必要がないほどだつた。

自転車と一緒に、私は町の中へ駆け込んでいった。大きな音を立ててブレーキをかけ、自転車をほうり出し、私はヒルの宿屋の正面玄関へ飛び込んだ。

もうすぐ昼食時で、まだ料理は出されていないが、食堂には人が集まり始めていた。その中へ私は水着姿で飛び込んでいったのだ。ひどくあわてた様子で大声を出し、早口で事情を伝えようとする私の姿はなかなかの見物だつたと思う。ヒルもすぐに調理場から出てきたが、飲み込みの早い男だつたのはありがたかった。

三十分後には、救難隊が港を出発していた。この島は日当たりがよく、島のまわりを浅い海底が取り巻いていたので海綿かいめんの生育に適していた。化粧や入浴などに使うスポンジのことだが、現在ではかなりプラスティックの物にとってかわられたといつても、天然物独特の風合いは捨てがたく、愛用している人も多い。だからこの島でも、海綿の採集が今でも行われていたのだ。

採集には、簡単な構造の潜水服のよだなものを用いる。ガラス製の金魚バチのよだなものに空気パイプを取り付け、これを頭にかぶつて潜水するのだ。潜水者の頭上には船が待機し、甲板の上では空気ポンプがゴトゴトと動き、その空気パイプを通して海中に空気を送るのだ。こういう船がこの島には数隻いて、しかもその一隻が、運良くちょうど出港準備が整つたところだつたのだ。

救難隊といつてもこの船ともう一隻、連絡用の小船という陣容でしかなかつたが、小さな島ではこれで精一杯だつた。アクセルを全

開にし、波をけたてて現場へ急いだ。

白い岩壁が正面に近づいてくると、たまらなくなつて私は海に飛び込んだ。まだ少し距離があつたが、洞窟を田指して進んだ。

もちろんチビ介はそこにいた。特に何も起じた様子はなく、すぐ私を見つけて目玉を動かした。身動きをさせないように、私は田の下をなでてやつた。

できるだけ岩壁に近づかなくてはならないが、衝突するわけにはいかないので、船の連中は操船に苦労しているようだつた。だがなんとか目的を達したようだ。マストの一本を取りはずし、つつかい棒代わりに岩壁に押し当て、船を固定することに成功したのだ。

検査コックと呼ばれているのだが、チビ介の接続装置には「ぐくさなつまみがあり、これをひねると小さな穴から空気が噴き出すようになつてゐる。本来、空気がちゃんと流れているかどうかを確認するためのものだが、私はときどきそれを開き、コックに口をつけて息を吸い込んだ。そうやって海中で待機していたのだ。

船上の空気ポンプがすでに始動していることを私は知つていた。やがて人影が船から海に飛び込むのが見え、漁師の一人だつたが、空気ホースを手に私のほうへ泳いでくる姿が目に入った。

「何をやつているのだろう」という顔で、チビ介は私たちを見つめている。漁師の手からホースを受け取り、私は調べた。

つまくいきそうだ。口径もつなぎ田の形もつまくあつていて。パイプを引き抜いて、私はチビ介を自由にしてやつた。そこへすかさず漁師がホースを差し出した。一人で力をあわせて、これをハマダ

ラカ兵のパイプに接続したのだ。接続がうまくいった瞬間、手のひらに伝わってくる力チンという振動がいかに快く思えたことか。

大きな身体をすり寄せてくるので、私は背中に乗つて、チビ介をなでてやらなくてはならなかつた。息を吸うために、漁師はもう水面へむかって泳ぎ始めている。同じようにしようと、私もチビ介に指示を出した。チビ介は了解し、私の乗せたまま尾びれを動かした。すぐに漁師など追い越してしまい、私たちは波の上にぎあつと姿を現すことになった。

うまくいったという意味で私が手を振ると、漁師たちも手をたたいてくれた。繩ばじごを降ろして、やつと水面に顔を出した仲間を引き上げにかかつた。

本土から応援が到着したのは、夕方近くのことだった。必要な機械や道具類と潜水夫を積んだ高速艇で、すぐに私は任を解かれ、宿屋へ帰つて休むことを許された。今回も指揮官はアップル大尉だつたが、島の町役場の中に臨時に作られた指揮所を離れる直前、私は質問してみた。

「アップル大尉」

司令部から届いたばかりの電文に目を通していようとひうだつたが、大尉はすぐに顔を上げた。「どうした？」

「あの竜騎兵は生きているのでしょうか？」

「さあな」大尉は机に頬杖(ほおづえ)をついた。「よくわからんが、漁師たちの話では、ポンプで送り込んでいる空気がパイプの先のどこかでわずかずつ消費されているのは確かだということだ。それが誰かが呼吸しているせいなのか、単にどこから空気漏れを起こしているだけなのかはわからんが」

そのあと私はすぐに宿屋へ帰つたのだが、疲れていたこともあって、肝心なことをすっかり忘れていたのだ。夕食をすませ、6時ごろにはベッドに入つたのだが、突然思い出し、真夜中に目（まめ）が覚めた。あわてて時計を見ると、十一時を三十分すぎたところだつた。ベッドを抜け出し、大急ぎで服を着、階段を駆け下りていつた。

まだ指揮所にいたので、アップル大尉はすぐに見つけることができた。無線機で誰かと話していたが、私に気づいて顔を上げた。「どうした、スミス」

「すみません。忘れていました。いま思い出したんです」

「何を?」

「今すぐ出発すれば、ローレライ潜水艦をつかまえることができるかもしません」

「なんだって?」

私は説明を始めた。島の裏側に小さな岬があり、とがった姿が合流地点のよい目印になること。その場所で真夜中、ローレライを見かけたこと。ローレライはライトをともし、へやきにある入口から竜騎兵とクジラを収容したと思われること。

「ふうん」アップル大尉は口をゆがめ、下を向いて頬杖をついた。私の言ったことがいかにも気に入らないという表情だ。仕事が増えるのがいやなのだろう。だがとうとう目を上げ、私をじろりと見た。「おまえの身体は大丈夫か? 疲れは取れたのか?」

「はい、大丈夫です」

「よし、ついて来い。とにかく人手がたりん」大尉は立ち上がった。

「ハマダラカの竜騎兵はどうなったんですか?」

「潜水夫が潜つて、岩を一つずつ取り除いていくところだ。手作業だからなかなかはかどらんが、やつの身体は見えてきた」

「生きているんですか?」

事情を記したメモをびっくりした顔の秘書に押し付け、指揮所を出ながら、大尉はうなずいた。「意識はないが、呼吸はしている。とにかく早く収容したい」

通りに出で、私たちはヒルの宿屋へむかって歩き始めた。私は口を開いた。

「ローレライはどうするんですか？」

「人手がないから、オレとおまえの二人で何とかするしかない。ヒルや漁師たちも協力はしてくれるだろうが」

真夜中の町は暗く、月と星以外に明かりはない。通りの左右にある家々は真っ黒に見え、細かい部分がわからないから、黒い石でできた四角い箱だといわれてもそのまま信じることができそうだ。舗ほ装のない道に、私と大尉の足音が響いていた。

不本意ながら私たちは、ヒルや漁師たちをベッドからたたき起こす形になってしまった。だがすぐに協力が得られ、エンジンをかけ、私たちは三十分後には漁船に乗り、港を出発することができた。甲板の上で温かい風を浴びながら、私はもう一度事情を説明した。

「その岬なら知っているよ」ヒルが言った。「あの岬の先で海底がストンと深くなっているから、潜水艦が隠れるには好都合だろうな」

「どのくらいの大きさのある潜水艦なんだね?」漁師の一人が言った。

「四十メートルぐらいかな。本当にずんぐりしたハマキのような形だ」アップル大尉が答えた。

「そいつをどうやって捕まえるんだね？」

「それを悩んでこるのは？」

「言つとぐが、これはただの漁船だからな。武器なんぞ一つも積んでらんぞ」

岬が近づいてくるとエンジンを止め、私たちは帆を上げた。古い時代の船には、帆とエンジンの両方を備えているものがあったのだ。風を受けてゆっくりとではあるが、船はほとんど音を立てずに前進することができた。それでも私は、なんとなく声をひそめて話さないでいるからな。いくらソナーを備えているとしても、水中にいる潜水艦に、水上の話し声が聞こえるはずはないのだが。「エンジンを止めているから、この船のことを見つかることがありますよね」

アップル大尉は私を見つめ返した。月の光を受けて、顔は青白く光っている。

「海岸のすぐそばだからな。波の音が邪魔で、ソナーが何かの役に立つとは思えんよ」

私ははつとした。思わず見回したが確かにそのとおりで、岩にぶつかって砕ける波の音が私たちを取り囲んでいる。私たちは海岸からたった50メートルほどのところにいるのだ。小さな声だが漁師たちが笑い始めたので、私はひどく恥ずかしくなった。彼らから見れば、私など何も知らないただの子供に見えるのだろう。

月が明るいせいで、陸の地形はかなりよく見てとることができる。

岬はもうそこまで迫っている。帆をたたみ、私たちはスピードを落とした。

波を立てないうちに、ゆっくりとイカリを下ろした。だが海底に届くほど深くではなく、ほんの数メートルだ。船の左右に一つずつあるので私と若い漁師の一人が水に入り、身体が浮かび上がったまわないうちにイカリにつかまりながら、水中を偵察することになった。

ローレライのライトは強力で、すぐに見つけることができた。見つけたのは私ではなかつたが、水上に顔を出し、若い漁師は興奮した様子で言った。

「あそこにいる。『せりあらじ光るよ』

「距離は?」アップル大尉が言った。

「よくわからないが、200メートルぐらいかな」

私たちは水から上がり、すぐにはボートが下ろされた。ボートは3そうあり、一人ずつ乗つてオールを手にしていた。私はビルと一緒に、ボートをこいでいった。

船から離れ、ボートはゆっくりと水の上を進んでいった。私のいるボートには帆に使う布や古いシーツが一抱え積まれていたが、他の2そうは違っていた。漁に使う網を積んでいたのだ。太い縄で作られた大きなものなのでボートの上に山盛りになり、じぎ手たちは窮屈^{きゅうくつ}そうにしている。おまけに魚網は重いので、もう少しで沈んでしまいそうなほどボートは水にめり込んでいる。

潜水艦が近づくと、もう水に潜らなくても、オールを少し深くか

さすだけで、ローレライのライトが照り返すのを見ることができるようになつた。その光がだんだん強くなるので、自分たちが潜水艦に近づきつつあると知ることができる。

とうとう私たちは、水の上にシユノーケルが突き出しているのを直接見ることができた。ただの金属製のパイプに過ぎないが、まるで海底に突き刺さった杭のように、波の間に垂直に突き出している。

シユノーケルまであと10メートルというところまで行き、私とヒルはボートを停止させた。ヒルが振り返り、他の2人に合図を送つた。

あちらのボートにいるアップル大尉がなにやら指示を出しているのが見える。シユノーケルの位置から計算して、スクリューがどのあたりにあるのか見当をつけようとしているのだろう。

だがそれは、この潜水艦がどの方向を向いてとまっているかがわからないと難しい仕事だ。しばらくの間彼らは水の上を成果なくこぎまわり、時間を費やしてしまつた。だがとうとうスクリューを見つけ、アップル大尉の顔がにんまりと輝くのが見えた。

水の中に入り、アップル大尉たちがスクリューに魚網をからみつかせるまで、私とヒルは数分間待つていなくてはならなかつた。水中での作業なのだから、簡単ではなかつただろう。それでもなんとかうまくいったようで、アップル大尉たちがボートの上にはいのぼるのが見えた。合図を受け、今度はヒルと私が仕事に取りかかる番だった。

ゆつくつとだが潜水艦のエンジンは動き続けているので、シユノ

一ケルの先から排氣ガスが立ち昇っている。それが匂うので、私たちは風上からボートをこぎ寄せることにした。

丸いパイプをぶつ切りにしたような形で、シユノーケルは空を向いて開いている。そこから新鮮な空気を取り込んでいるのだ。その穴のそばへ私は布を持っていった。最初、布はまるで掃除機の口のようにひとりでに吸い込まれていった。だがそれも、パイプの内部が詰まり始めるまでのわずかの間のことしかなかった。

すぐに空気の流れはどどーおり始め、指先にもほんの少し感じられなくなつた。パイプの中へ、私はせつせと布を押し込みはじめた。

我ながらよくがんばつたものだと思つ。ボートの上に一抱えあつた布は、すぐに品切れになつてしまつた。すべてシユノーケルの中に詰め込まれ、フタをしてしまつたのだ。ブスンと音を立ててエンジンが停止したのは、そのときのことだった。

私とヒルは再びボートをこぎ、潜水艦から離れ始めた。潜水艦の乗員たちは、今ごろ頭をひねつてしていることだろう。エンジンが突然停止した理由がわからないだらうし、自分たちが吸う空気の循環が止まっていることにもすぐに気がつくに違ひない。

それに気がついたときの彼らのあわてぶりは簡単に想像がつくが、もちろん原因を調べようとするだらう。そのためにやることひとつはない。

私たちが見ている前で海面がざわめき、白く波立ち始めた。圧縮空気を使って、潜水艦がバラストタンクの中を空にしようとしているのだ。そうなると船体が軽くなり、潜水艦は浮上することになる。

安全な距離まで離れ、私たちは眺めていた。アップル大尉が言ったとおり短いずんぐりとした潜水艦で、あまりスマートな形ではない。ハマキのようというのは本当にふさわしい言い方だ。

水面に顔を出すとすぐにハッチが開き、乗員が姿を見せた。突然の故障にあわてていて、まわりを見回す余裕もなく、私たちになど気づきもしなかつた。もちろん私たちも明かりを消し、息を潜めていた。

ハマダラカ潜水艦兵は、シユノーケルの点検を始めた。そして何が起こっているのか気がついたのだろう。憎々しげに声を上げ、シユノーケルの先端に見えている布を取り除こうとした。だが一人や二人の力でどうこうできる状態ではない。布は奥深くまで徹底的に押し込んであるのだ。

悪態をついてシユノーケルから降り、ハマダラカ兵は闇の中を見透かそうとした。これが誰かの手になる破壊工作だということは明らかだからだ。アップル大尉が合図をし、漁船が電灯のスイッチを入れたのは、その瞬間のことだった。

船全体が明るく照らし出され、夜の海面に浮かび上がった。同時に3つのボートの姿も照らされたに違いない。あつと大きな声を上げ、ハマダラカ兵はハッチの中へ駆け戻つていった。バタンと大きな音を立てて、ハッチが閉じた。

「どうするつもりなのかしら?」私はつぶやいた。

「決まっているさ」ヒルが答えた。「バッテリーの力でモーターを回して逃げようとするだろうな」

「それだと1時間ぐらいしか走れないはずよ。バッテリーの電気はすぐになくなってしまうもの」

ヒルは笑って私を見た。「それどころか、スクリューを回すことだつて難しいわ」

ヒルがそういう終わると同時に、潜水艦の船尾あたりで大きな水しぶきが上がった。スクリューが回転を始めたのだ。だがあまり元氣のある回り方ではなかつた。どことなく力がなく、弱つた魚のような感じだ。何重にもからみついた魚網が邪魔になつてているのだろう。

しかしモーターの力というものは恐ろしいもので、潜水艦はゆっくりとだが動き始めていた。かじを切り、へさきが右を向き始める。外海へ通じる方向だ。私たちは顔を見合わせるしかなかつた。

「スミス!」水の上を越えて、アップル大尉の声が聞こえてきた。

「はい」振り返り、私は叫び返した。

「やつは外海へ逃げる気だ。おまえはすぐに漁船へ戻れ。急いでクジラを連れてこい。潜水艦を追跡するんだ」

その声は、漁船の上に残っていた漁師の耳にも届いていたに違いない。すでにエンジンをふかし、私にむかってかじを切る姿が見え

ていた。

ボートを寄せ、繩ばじょをつたつて私が甲板の上にあがるころには、漁船は町へ向かって全速を出していた。ヒルたちを乗り込ませる余裕はなかつた。彼らはあそこでじょらく待つことになるだろつ。

大きな島ではないから、チビ介のいる船小屋まで遠いわけではないのだが、私はあせりを感じないではいられなかつた。へさきに立ち、ずっと前方をにらんでいた。

船小屋に着き、チビ介を海に出すまで15分もかからなかつたに違ひない。だが私にはとても長い時間のように感じられた。時間を節約するため、潜水服を身につけることはあきらめなくてはならなかつた。水着のまま、私はチビ介のベルトにつかまつたのだ。

潜水艦に追いつくにはもう少し時間がかかってしまった。うまく発見できるだらうかという不安がなかつたわけではない。再び潜水してしまつている可能性が高いのだ。

だがあまり心配する必要はないようだつた。偶然だが、私たちがスクリューに巻きつけた魚網にはガラス製の浮きがいくつか取り付けられていたのだ。漁をするときに網が水面近くにとどまるようにするためのものだが、ボールのように丸い形で、数十センチの直径がある。潜水艦は潜水し、波の下に姿を消していただが、この浮きが水面に見えていて白い波を引くものだから、よい目印になつたのだ。私とチビ介はすぐに追いつくことができた。

風船玉をもらつて、大喜びで空に浮かべて歩いている子供のよくな眺めだが、もちろん乗員たちは気づいてはいだろう。スクリューの力で魚網は引き裂かれ、それでも切れてはしまわづ、ロープ

のように長く伸びている。月光を受けて輝くガラス玉は簡単に追いかけることができた。

潜水艦がどこへ行くつもりなのかはわからなかつた。だが、どうせ長くはもたない。あと數十分でバッテリーは空になり、やつは浮上するしかなくなる。それまで私はのんびり着いていけばいい。

夏の夜明けは早い。速度をゆるめ、潜水艦が浮上を始めたのは、東の空がうつすらと明るくなるころだった。

少しでも疲労を防ぐために、チビ介は私を頭の上に乗せて運んでくれていた。そこだと、ベルトにつかまりつつも腹ばいになることができる。空気パイプをつなぐ接続装置が、波よけの代わりになってくれる。

まったくこれは、のんびりした仕事になつた。チビ介の肌をなでてやりながら、ときどき私は波をもてあそんだ。雲はなく、月と星がくつきりと出でている。星を見ながら日分量ではあるが、時間つぶしに方位を測つてみたほどだ。

手のひらを押し付けると、チビ介の肌を通して心臓の脈動を感じ取ることができる。クジラは分厚い脂肪層を持つてゐるからじくかすかではあるが、それでもちゃんと感じることができるので。船に乗つて甲板に横たわつても、エンジンの響きを感じることはできる。船のエンジンもクジラの心臓も同じようなものではないかという人もいるかもしぬないが、私は賛成できない。

そうやつてチビ介もリラックスして、のろのろと進むガラス玉を追いかけ続けたのだが、とうとう停止し、潜水艦が浮上を始めたのだ。

水面に白い波が広がるのが見えた。合図を送り、私はチビ介に安全な距離を取らせた。

昇り始めた朝日を受け、潜水艦はゆっくりと姿を現した。へさきが鳥のクチバシのように開く仕掛けになつていて、例の小さな水中翼もちゃんとついている。間違なくローレライ型潜水艦だ。

水着のまま潜水服もなくといつても、私も信号銃だけは持つていた。腰のベルトに突き刺してあつたのだが、手に取り、ゆっくりとチビ介の頭の上に立ち上がった。

ガタガタと音が聞こえ、乗員がハッチを開こうとしているようだ。空に向けて、私は信号銃の引き金をひいた。パンと音がして弾が打ち上げられ、何百メートルか上空で大きくはじけ、ボンと大きな音を響かせた。白い雲のような煙も広がった。水平線に隠れかけてはいるが、島はまだ見えている。きっと誰かが気づいてくれるだろう。

ハッチを開けて身を乗り出したハマダラカ兵と、私は間近に顔を合わせることになった。金髪の若い男だったが、私が信号弾を発射したことにはすぐに気がついたに違いなく、ひどく不快そうな、つらそうな顔をした。自分たちのこれから運命を悟つてしまつたのだろう。

思つていたとおり、島の方角からすぐに飛行艇が一機姿を見せた。着水するまで十分もかからなかつた。もちろん武装したヒトリ兵たちが乗り込んでいる。あきらめたと見えて、ハマダラカ兵たちは何の抵抗も見せなかつた。念のため高速艇が到着するのを待つてから、私は現場を離れた。チビ介に合図を送り、島へむかつてゆっくりと戻り始めたのだ。

チビ介を船小屋に入れ、上陸すると、驚いたことにヒルが迎えにきてくれていた。小さな馬車に乗つていて、着替えた私を町まで連れ帰つてくれた。

もうすっかり日が高くなつていたが、ベッドにもぐりこんだ私は翌朝まで目を覚まさなかつた。誰も邪魔をせず、そのまま寝かせておいてくれた。

目が覚めたとき、島にはもうほとんど軍人の姿がないことに気がついて、私はひどく驚いた。少し早いが朝食の時間だつたので、着替えて私は階段を降りていつた。

食堂にはヒルがいて、テーブルクロスの上に皿やフォークを並べているところだつたが、ヒトリの軍人たちは今朝早くほとんどが島を離れてしまつたのだと教えてくれた。ローレライは本土の基地へ向けて曳航され、乗員たちは拘束され、あの竜騎兵も救出され、飛行艇で本土の病院へ運ばれたということだつた。洞窟から助け出されるとすぐに意識を取り戻したが、足に負傷しているから入院させたのだという話だつた。

島の風景はいつもと同じように穏やかだったが、軍の上層部や政府は今ごろ大騒ぎをしているに違いなかつた。領海内で敵国の兵が活動していたのだ。しかもその目的もまだ不明なのだ。それについてはもちろん尋問じんもんが行われるのだろうが、ハマダラカ兵たちも簡単に口を割つたりはしないだろ。

ローレライの船内も搜索されるだろが、おそらく何も見つからないだろ。信号弾を打ち上げた直後、私が見ている目の前で、ハマダラカ兵たちは書類のたばを海に投げ捨てたのだ。一瞬ふれただけで簡単に水に溶けてしまう特別製の紙を使った書類に違ひなかつた。

だがハマダラカ兵たちが与えられていた任務が何だつたのか、私は見当がつくような気がしていた。でも自信があつたわけではない。アップル大尉に正式に報告する前に、少し調べてみる必要があると思った。だからポケットから取り出したスパーク船長の指輪をテーブルの上に置き、私はヒルに見せたのだ。

「それはいつたい何だね？」

目を大きく開き、ヒルはおどけた表情を装つたが、私はごまかされなかつた。ヒルの目の前にかざし、私は3つの三角形模様を指したのだ。その意味をヒルはすぐに理解したようだつた。私は口を開いた。

「最初あなたは、どうして気がついたの？」

ヒルはため息をついた。「ほんの偶然さ。もう何年も前、嵐が近づいて風がひどく強い日のことだつたが、海岸べりを歩いていて、ある岩の割れ目からえらく潮くさい風が吹き上げてくることに気がついた。調べてみると、岩の間に人がやつと一人通れるだけのすき

まがあり、好奇心に駆られて、オレはそれをたどりていったのや」

「それで？」

「数メートル進むと穴は突然広くなり、洞窟にぶつかつた。地質の関係で、この島には天然の洞窟がいくつもあることは知っているだろ？　その一つだったのぞ」

「それから？」

「洞窟は半分水につかっていた。海の水さ。この洞窟には、海の側にももう一つ入口があつたんだ。ハマダラカの竜騎兵は、オレとは逆にその入口から洞窟の中へ入ろうとしていたんだな」

「あんたは財宝を見つけたのね」

「ああ」

「どんなものだつたの？」

「洞窟の内部は岩の壁ばかりで、始めは何かが隠してあるようには見えなかつた。だがじっくり眺めていて、岩壁が一ヵ所だけ、不自然に色が違うことに気がついた。それは自然の岩ではなく、コンクリートで塗り固めたものだとすぐにわかつた。長い年月でヒビが入つていたから、引きはがすのも難しくはなかつた」

「どんな宝が出てきたの？」

「抱えある木箱ひとかかだつたが、中身は金貨がつまつていた」

「へえ」

「オレは大喜びしたが、調べてみると金貨といつても使われている金の純度が低く、思つたほどの値打ちはなかつたな。それでもちよつとした金持ちにはなれた」

「そのお金でこの宿屋を建てたわけね」

「しかしあんた、どうして気がついたんだね？」

「何言つてゐる？」ポケットに手を入れ、私はあの小さな「インを取り出した。「船小屋の入口の前に、あんたはこれをわざと落としていったのでしよう？」

「なぜそつ思つんだね？」

「話してくれたのはあんた自身だから、私がスパーク船長の財宝のことを知つていることはあんたも承知しているわけだし、私が三角岩に関心を持つていることもあんたは知つていてるじゃないの」

「ふん」ヒルは機嫌よさそうに笑つた。「あんたをからかつてやろうと思つてね。いたずら心を抑えきれなくなつたのさ。しかしあんたは、財宝のことを上司に報告するのかい？　軍から呼び出されて、オレは話を聞かれたりするのかい？」

「ううん」私は首を横に振つた。「もちろん一応は報告するわ。ハマダラカが何のためにこの島に来ていたのか、理由を明らかにしなくちゃならないからね。軍から人が来て、あの洞窟を調べるだろうと思うわ。だけどあんたが見つけたんだから、財宝はあんたのものよ。海軍は形だけ調査をして、きっとすぐに終わらせるだろつと思

「う

「ハマダラカの連中も宝の話をどこかで聞きつけて、調べにきていたんだな」

「そうでしょうね。何十年前の『ゴールドラッシュ』のとき、島の土地は調べつゝされてしまつたから、ひそかに竜騎兵を送り込んで、海中を調べていたのでしょうね」

「そしてあの洞窟を調べていたとき、突然岩崩れが起つた」

「アップル大尉の話では、洞窟全体が崩れかかっていて、かなり危険な状態だつたそうよ。岩崩れにあわなくて、あんたは幸運だつたのよ。ハマダラカ人も無謀なもんだわ」

ヒルはにっこり笑つた。「どうだつていいさ。もうハマダラカの連中もこの島には興味を失つただろう」

「そうあつてほしいわ」

ヒトリ海軍も、やがて私やヒルと同じ結論を出したようだつた。ロック諸島の警備は今後必要なしことにになり、私にも撤退が命令された。

夏の終わりの明るい日、船小屋の前に404号飛行艇が着水し、チビ介と私を乗せて、本土へ向けて飛び立つたのだ。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9520d/>

海の竜騎兵 2

2010年10月8日21時44分発行